浦幌町立博物館

紀要

第13号

『浦幌町郷土博物館報告』創刊号～第45号
（1972～1996）継続

BULLETIN OF THE HISTORICAL MUSEUM OF URAHORO

目　　次

荒　川　和　子：「浦幌町立博物館所蔵の2012年度採集の蝶標本」…… 1
円　子　紳　一：「浦幌町の外来種を考える」…… 7
佐　藤　喜　和：「浦幌町におけるヒグマ駆除数の推移Ⅱ（1967～2012年）」…… 15
栗　原　憲　一：「北海道十勝郡浦幌町に分布する根室層群川流布累層中の白亜紀／古第三紀境界」… 25
持田　誠・加納　寛之：「吉田康登氏採集の植物標本」…… 31
三浦直春　解読：「村有土地ニ關スル書類⑽」…… 42

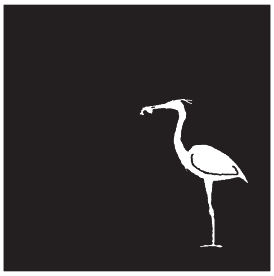
2013
3

北　海　道
浦　幌　町　立　博　物　館

浦幌町立博物館

紀要

第13号



『浦幌町郷土博物館報告』創刊号～第45号
（1972～1996）継続

BULLETIN OF THE HISTORICAL MUSEUM OF URAHORO

2013
3

北海道
浦幌町立博物館

序

「浦幌町立博物館紀要」第13号をお届けします。2012（平成24年）年度の浦幌町立博物館の調査研究活動の成果と常日頃から本館の活動に何かとご指導ご協力をいただいている方々の報文、論文、解読などを取りまとめ、第13号といたしました。

さて、地域における博物館を取り巻く環境は依然として厳しいものがありますが、博物館はその存在理由を明確に地域社会に示すとともに、時代の流れや地域課題に沿った活動が求められてきております。

このような状況の中で、博物館としての理念や目的を真剣になって問い直すことが必要になってきており、博物館事業の根幹をなす調査研究や地域に密着した博物館活動をどのようにして継続していくかが大きな課題となっています。

本町では、浦幌町教育の日が制定され、一昨年からは学校支援ネットワークの結成や今年度は小中一貫教育やコミュニティスクール実施に向けての調査研究など学校・地域・家庭が連携して地域総ぐるみで教育活動を行う「浦幌スタイル教育」が展開されております。今後、生涯学習施設である博物館の人づくりまちづくりに果たす役割は益々大きくなってまいります。

その活動の一部であるこの紀要は、広く論文や報告を収録するために創刊されたもので、1972年に創刊された「浦幌町郷土博物館報告」を起源として現在まで半世紀に亘り毎年発刊されております。今後も博物館資料の調査研究に限らず、幅広い編集を目指して参りたいと考えております。

結びになりますが、当「紀要」発刊にあたり平素より本館の管理運営に格別のご指導・ご協力を賜っています多くの皆様に深甚なる敬意と感謝を申し上げごあいさつといたします。

2013年３月

浦幌町立博物館長　佐　藤　芳　雄

浦幌町立博物館所蔵の2012年度採集の蝶標本

荒　川　和　子

整理番号	受入番号	点数	計測値	採集地	採集年月日	採集者
シロチョウ科　Pieridac						
オオモンシロチョウ(♂)　*Pieidae brassicae* MÉNÉTRIÈS						
1101	2013- 1	2	60～62	北海道十勝郡浦幌町南町	2012.7.12	荒川和子
1102	2013- 2	1	55	北海道十勝郡浦幌町南町	2012.7.18	荒川和子
1103	2013- 3	1	56	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2012.9. 2	荒川和子
モンシロチョウ　*Pieris (Artogeia) rapae* LINNAEUS						
1104	2013- 6	1	45	北海道十勝郡浦幌町南町	2012.8.24	荒川和子
モンキチョウ　*Colias (Colias) erate* ESPER						
1105	2013- 7	1	54	北海道十勝郡浦幌町南町	2012.8.18	荒川和子
1106	2013- 8	2	43～45	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2012.9.16	荒川和子
1107	2013- 9	1	48	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2012.9.17	荒川和子
エゾスジグロシロチョウ　*Pieris (Artogeia) napi* LINNAEUS						
1108	2013- 4	4	44～48	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2012.7.27	荒川和子
1109	2013- 5	1	49	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2012.7.28	荒川和子
セセリチョウ科　Hesperiidae						
コチャバネセセリ　*Thoressa vaeia* MURRAY						
1110	2013- 10	2	29～30	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2012.7. 4	荒川和子
1111	2013- 11	2	30～32	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2012.7.27	荒川和子
コキマダラセセリ　*Ochlodes venata* BREMER & GREY						
1112	2013- 12	1	28	北海道十勝郡浦幌町南町	2012.7.17	荒川和子
タテハチョウ科　Nymphalidac						
ウラギンヒョウモン　*Fabriciana adippe* LINNAEUS						
1113	2013- 13	1	53	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2012.8.31	荒川和子
ウラギンスジヒョウモン　*Argyronome Iaodice* PALLAS						
1114	2013- 14	1	53	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2012.9.16	荒川和子
ミドリヒョウモン　*Argynnis paphia* LINNAEUS						
1115	2013- 15	1	60	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2012.8.31	荒川和子
クジャクチョウ　*Inachio io* LINNAEUS						
1116	2013- 16	1	52	北海道十勝郡浦幌町南町	2012.9.16	荒川和子
1117	2013- 17	1	52	北海道十勝郡浦幌町南町	2012.9.20	荒川和子
フタスジチョウ　*Neptis rivularis* BUTLER						
1118	2013- 18	1	45	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2012.7. 4	荒川和子
1119	2013- 19	1	51	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2012.8.31	荒川和子

管理番号	受入番号	点数	計測値	採集地	採集年月日	採集者
アカマダラ　*Araschnia levana* LINNAEUS						
1120	2013- 20	1	32	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2012.8.31	荒川和子
ジャノメチョウ科　Satyeridae						
サトキマダラヒカゲ　*Neope goschkevitschii* MENETRIES						
1121	2013- 21	2	58～64	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2012.7. 4	荒川和子
1122	2013- 22	1	60	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2012.7. 14	荒川和子
ヤマキマダラヒカゲ　*Neope niphonica* BUTLER						
1123	2013- 23	2	47～59	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2012.7. 4	荒川和子
1124	2013- 24	1	60	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2012.7. 5	荒川和子
1125	2013- 25	1	55	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2012.7.27	荒川和子
ヒメウラジャノメ　*Ypthima argus* BUTLER						
1126	2013- 26	1	39	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2012.7.17	荒川和子
クロヒカゲ　*Lethe diana* BUTLER						
1127	2013- 27	1	39	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2012.6.25	荒川和子
1128	2013- 28	2	44～46	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2012.7. 4	荒川和子
1129	2013- 29	1	44	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2012.7.27	荒川和子
ジャノメチョウ　*Minois dryas* SCOPOLI						
1130	2013- 30	2	50～52	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2012.7.28	荒川和子
1131	2013- 31	1	59	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2012.8.13	荒川和子
1132	2013- 32	2	54～61	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2012.8.31	荒川和子
シジミチョウ科　Lycaenidae						
ベニシジミ　*Lycaena phlaeas* LINNAEUS						
1133	2013- 33	2	28～30	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2012.8.31	荒川和子
ゴマシジミ　*Maculinea teleius* BERGSTRÄSSER						
1134	2013- 34	1	31	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2012.9.16	荒川和子
ルリシジミ　*Celastrina argiolus* LINNAEUS						
1135	2013- 35	1	23	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2012.8.12	荒川和子
1136	2013- 36	1	26	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2012.8.23	荒川和子
1137	2013- 37	1	29	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2012.8.24	荒川和子
1138	2013- 38	2	25～26	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2012.8.31	荒川和子

参　考　文　献

川副昭人・若林守男（1976）『原色日本蝶類図鑑』　保育社　東京

オオモンシロチョウ

モンシロチョウ

モンキチョウ

エゾスジグロシロチョウ

コチャバネセセリ

コキマダラセセリ

ウラギンヒョウモン

ウラギンスジヒョウモン

ミドリヒョウモン

クジャクチョウ

フタスジチョウ

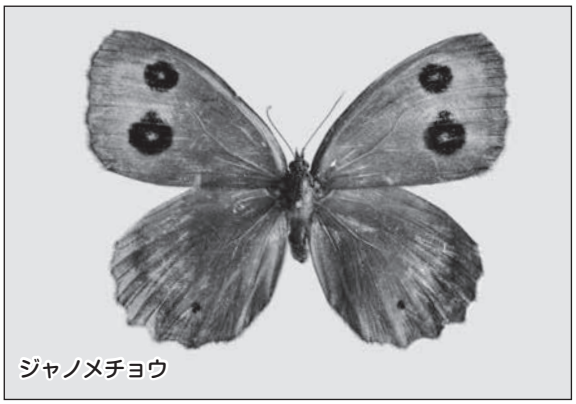
アカマダラ

サトキマダラヒカゲ

ヤマキマダラヒカゲ

ヒメウラジャノメ

クロヒカゲ


ジャノメチョウ

ベニシジミ

ゴマシジミ

ルリシジミ

浦幌の外来種を考える

円　子　紳　一

外来種とは

本来はその地域に生息（分布）していない生物が、国外や国内の他地域から人為的または非人為的に侵入した場合に、その生物を外来種として取り扱うことになる。

時にはフィッシングのために放流されたブラックバスやニジマスであったり、農業用のセイヨウオオマルハナバチ、食用に摩周湖に放されたウチダザリガニ、ペットとして飼われていたアライグマ、足寄町のオンネトー湯の滝に生息するテラピアやグッピー、海を渡って来たと思われるオオモンシロチョウであったりと、侵入した経緯はさまざまである。

直接的に農業被害の影響があるもの、在来種を圧倒しているもの、はっきりとした影響が表れていないものなどもあるが、それぞれが何らかの形で在来種や人間社会に関わることで、その地域本来の自然が歪められる恐れがあるように思われる。

北海道の外来種リスト（北海道ブルーリスト）

アライグマによる生態系への影響や農作物等の被害、ブラックバスの放流が確認されたことなどから、種毎に導入された経緯や生物学的特性、その影響などを取りまとめ、北海道における外来種の実態を把握し、関係機関、団体等が対策を行う基礎資料とするために「北海道の外来種（北海道ブルーリスト2004）」が2004年3月に作成された。

2005年6月の「特定外来生物による生態系等への被害の防止に関する法律」（外来生物法）の施行により、特に大きな問題となっている「特定外来生物」の運搬や飼養等の原則禁止、防除の推進などが規定された。

2008年6月には「生物多様性基本法」が施行され、生物多様性を保全するため、外来生物等による被害の防止にかかる国の措置なども定められた。

こうした流れの中で、「北海道ブルーリスト2004」を改訂した「北海道ブルーリスト2010」が2010年6月に作成された。「北海道ブルーリスト2010」では、哺乳類25種、鳥類8種、爬虫類10種、両生類19種、魚類36種、昆虫90種、昆虫以外の無脊椎動物33種、植物639種の合計860種が選定された。

対象生物の選定の考え方（カテゴリー区分）

北海道ブルーリストでは、国外からの外来種とあわせて、国内（道外）からの外来種も選定されている。対象生物の選定は次の4つの視点から行われている。

〈4つの視点〉

① 本道に導入されているか。

② 本道に定着できるか。（越冬の可能性など）

③ 本道に定着しているか。

④ 本道への影響等が報告されている、あるいは懸念されるか。

表１　カテゴリー区分

<table>
<tr><th>視点①</th><th>視点②</th><th>視点③</th><th>視点④</th><th colspan="2" rowspan="3">カテゴリー区分</th></tr>
<tr><td>本道に導入されているか</td><td>本道に定着できるか（越冬の可能性等）</td><td>本道に定着しているか</td><td>本道への影響は</td></tr>
<tr><td>○：導入されている
△：不明またははっきりしない
×：導入されていない可能性が高い</td><td>○：定着できる〈またはその恐れがある〉
×：定着できない可能性が高い</td><td>○：定着している
△：不明またははっきりしない
×：定着していない可能性が高い</td><td>○：影響等が報告されている
あるいは懸念されている
△：上記以外</td></tr>
<tr><td rowspan="6">○</td><td rowspan="5">○</td><td rowspan="2">○</td><td>○</td><td colspan="2">A</td></tr>
<tr><td>△</td><td colspan="2">B</td></tr>
<tr><td rowspan="2">△</td><td>○</td><td colspan="2">C</td></tr>
<tr><td>△</td><td colspan="2">D</td></tr>
<tr><td rowspan="2">×</td><td>○</td><td colspan="2">E</td></tr>
<tr><td>△</td><td colspan="2">F</td></tr>
<tr><td>×</td><td>×</td><td></td><td colspan="2">G</td></tr>
<tr><td rowspan="6">△・×</td><td rowspan="5">○</td><td rowspan="2">○</td><td>○</td><td rowspan="4">H</td><td rowspan="4">うち注意種h</td></tr>
<tr><td>△</td></tr>
<tr><td rowspan="2">△</td><td>○</td></tr>
<tr><td>△</td></tr>
<tr><td rowspan="2">×</td><td>○</td></tr>
<tr><td>△</td><td colspan="2">I</td></tr>
<tr><td>×</td><td></td><td></td><td colspan="2">J</td></tr>
<tr><td colspan="4">（昆虫のみ）　導入されている　「室内昆虫」である</td><td colspan="2">K</td></tr>
</table>

網がけしているカテゴリー区分に該当する種が、ブルーリストの選定種である

詳細は「北海道の外来種リスト」を参照のこと

表２　カテゴリー区分Ａの細区分

「Ａ１」：緊急に防除対策が必要な外来種
「Ａ２」：本道の生態系等へ大きな影響を及ぼしており、防除対策の必要性について検討する外来種
「Ａ３」：本道に定着しており、生態系等への影響が報告または懸念されている外来種

詳細は「北海道の外来種リスト」を参照のこと

北海道ブルーリスト2010に選定された生物数一覧

分類群	種数	カテゴリー区分								
		Ａ１	Ａ２	Ａ３	B	C	D	E	h	K
哺乳類	25	2	2	8	1	2	−	6	4	−
鳥類	8	−	−	3	2	3	−	−	−	−
爬虫類	10	−	1	−	−	2	−	2	5	−
両生類	19	−	1	4	−	−	−	3	11	−
魚類	36	2	2	12	7	6	4	3	−	−
昆虫類	90	1	1	46	−	17	1	2	1	21
昆虫以外の無脊椎動物	33	1	2	14	−	6	−	2	8	−
植物	639	−	17	106	409	−	107	−	−	−
合計	860	6	26	193	419	36	112	18	29	21

「北海道ブルーリスト2010」に選定された浦幌の生物一覧

分　類　群	カテゴリー区分	分　類　群	カテゴリー区分	分　類　群	カテゴリー区分
ドバト	A3	キジ	A3	カササギ	B
				鳥類計	3種
ニジマス	A2	コイ	A3		
				魚類計	2種
カラマツ	B	レンギョウ	B	セイヨウタンポポ	A2
ハイミチヤナギ	A3	トゲナシムグラ	A3	ニラ	B
ヒメスイバ	A3	ヒレハリソウ	A3	オランダキジカクシ	B
ナガバギシギシ	A3	チシマオドリコソウ	A3	オニユリ	B
エゾノギシギシ	A3	イヌホオズキ	A3	キショウブ	A2
ヒメナデシコ	B	ホソバウンラン	A3	コヌカグサ	A3
マツヨイセンノウ	A3	ヘラオオバコ	A3	オオスズメノテッポウ	B
ムシトリナデシコ	A3	セイヨウノコギリソウ	A3	ハルガヤ	A3
ノハラツメクサ	A3	ゴボウ	A3	カラスムギ	B
ウスベニツメクサ	B	ヨモギ	A3	コスズメノチャヒキ	A3
カラフトホソバハコベ	A3	ヤブヨモギ	A3	カモガヤ	A3
コハコベ	A3	アメリンセンダングサ	A3	シバムギ	A3
シロザ	B	キクニガナ	B	オニウシノケグサ	A3
コアカザ	B	アメリカオニアザミ	A2	ヒロハノウシノケグサ	A3
ウラジロアカザ	B	ヒメムカシヨモギ	A3	ホソムギ	A3
セイヨウワサビ	A3	コスモス	B	クサヨシ	A3
ハルザキヤマガラシ	A3	ヤネタビラコ	A3	オオアワガエリ	A3
イヌナズナ	B	ヒメジョオン	A3	ヌマイチゴツナギ	B
エゾスズシロ	B	ヘラバヒメジョオン	B	ナガハグサ	A3
キレハイヌガラシ	A3	ヒメチチコグサ	B	コムギ	B
ウスユキマンネングサ	B	キクイモ	A3	ストローブマツ	B
エゾノミツモトソウ	A3	コウリンタンポポ	A2	ウラジロハコヤナギ	A3
ルピナス	A3	キバナコウリンタンポポ	A2	アオゲイトウ	A3
コメツブウマゴヤシ	A3	フランスギク	A2	セイヨウアブラナ	B
シロバナシナガワハギ	A3	イヌカミツレ	A3	ムラサキウマゴヤシ	A3
シャグマハギ	A3	コシカギク	B	ハリエンジュ	A2
タチオランダゲンゲ	A3	オオハンゴンソウ	A2	オオイヌノフグリ	B
ムラサキツメクサ	A2	ノボロギク	A3	キヌガサギク	B
シロツメクサ	A2	オオアワダチソウ	A2	植物計	90種
オニツリフネソウ	A3	アレチノゲシ	B		
メマツヨイグサ	A3	オニノゲシ	B		
				合　計	95種

「北海道ブルーリスト2010」に選定された浦幌の生物数一覧

分　類　群	種　数	カテゴリー区分								
		A1	A2	A3	B	C	D	E	h	K
哺乳類	0	−	−	−	−	−	−	−	−	−
鳥類	3	−	−	2	1	−	−	−	−	−
爬虫類	0	−	−	−	−	−	−	−	−	−
両生類	0	−	−	−	−	−	−	−	−	−
魚類	2	−	1	1	−	−	−	−	−	−
昆虫類	0	−	−	−	−	−	−	−	−	−
昆虫以外の無脊椎動物	0	−	−	−	−	−	−	−	−	−
植物	90	−	11	51	28	−	−	−	−	−
合　　計	95	0	12	54	29	0	0	0	0	0

浦幌町の外来種

「北海道ブルーリスト2010」に記載されている浦幌町の外来種は、鳥類3種、魚類2種、植物90種の合計95種である。

その中で、鳥類のキジとカササギについては北海道ブルーリストとしては適切なのだが、浦幌町として考えた場合には若干の疑問を感じる。

キジ（亜種コウライキジ）については、分布は西南部に限られ、東部では稀とされており、浦幌町での観察記録は確認できない。

カササギについては、1993年に苫小牧で営巣が確認され、その後胆振管内や十勝管内では毎年のように確認されているようだが、浦幌町では1994年以降の観察記録がなく迷鳥に区分されている。

外来種としての対象生物の選定の考え方を浦幌町に置き換えた場合、②浦幌町に定着できるか、③浦幌町に定着しているかでは、両種は該当しないと考えることが自然であると思う。

その一方で、古くから若しくは数年前から浦幌町にも分布していると思われるヤブカンゾウ、クレソン、スモモ、ビロードモウズイカなど掲載されていない種類も多くある。このことはブルーリストの選定方法（現地調査の限界と文献による選定）に起因するものと思われ、今後の精査が待たれる。

また、浦幌町のブルーリストとしては記載されていないが、最近の事例として浦幌町での外来種として定着していると思われる生物も確認されている。特にオオモンシロチョウ、カブトムシ、セイヨウオオマルハナバチ、ハイコウリンタンポポの4種があげられる。

いずれにしろ、本来その地域に生息していない生物が出現するということは、人間の活動の拡大や自然の変遷によるものであるが、何がその地域の本来の姿かを考えるとき、外来種問題は大きな示唆を含んでいるように思われる。

オオモンシロチョウ（カテゴリー区分　A3）

本種が北海道で最初に確認されたのは、1995年（京極町）である。その後、ほぼ全道に分布を拡大し、現在では青森県・岩手県北部にまで広がっている。

もともとはヨーロッパ原産で、ロシア南東部には1991年に侵入したとされ、ロシア南東部のウラジオストック周辺で普通種になったのは1994、1995年頃からであり、北海道には飛来してきたものと思われている。

2010年10月11日　帯富
撮影者　円子紳一

十勝では1998年に新得町と広尾町で確認され、2000年には足寄町・士幌町・帯広市でも確認されている。1999年の記録が確認できていないが、十勝全域に分布を拡大したものと思われる。

浦幌町では2000年5月31日に帯富（北栄団地）で円子が♂を1頭採集し、その年は♀も含め多数確認できた。新鮮な個体がほとんどであることから、浦幌で発生したものと思われる。また、2000年8月と9月には立浪みつ子氏（浦幌町）により浦幌町桜町で採集されており、これらのことから、前年の1999年には浦幌町に侵入していたものと考えられる。

その後、モンシロチョウを駆逐するかのような勢いで発生していたが、浦幌町でのここ数年は生息数が減少しているようである。本種はキャベツなどのアブラナ科を食草としていて、大害虫になるのではと心配されたが、幼虫が高湿度に極端に弱いこと、農薬に対する抵抗性が弱いことから、その心配はほとんどなくなったとのことであり、浦幌町での減少の一因でもあると思われる。

カブトムシ（カテゴリー区分　A2）

2012年7月30日　留真
発見者　円子美喜子

2012年7月30日、留真温泉の奥でカブトムシ1♂を採集した。孫の円子晴を連れてクワガタ採りに瀬多来へ行ったが収穫がなく、車から降りてすぐに探索できる留真温泉の奥に行った時のことである。

すぐにミヤマクワガタを3頭見つけたその時、妻の美喜子が「あっ!カブトムシ！」と叫んだ。見ると近くの木の枝に、まさにカブトムシが止まっていた。

浦幌町の市街地で見たという話を聞くが、飼育されていたものが逃げ出したか、放されたものと思われるが、こんな山の中で見るとは思いもよらなかったので、かなり慌てた。いろいろと情報を集めていると、どうも数年前から瀬多来には定着しているようである。

本種は本来は北海道に生息していなかったのだが、人の手により本州から持ち込まれて分布を拡大している。道内では1968年から1972年ころに養殖場が作られ、数年後にその近辺で大発生が起きたことが知られている。

十勝では1974年に池田町、1978年に陸別町、音更町では最近に確認されている。また、帯広近郊でも発生しているとの情報もある。

こども達にとっては、クワガタ類と同様に憧れの昆虫であり、身近に生息していれば楽しいことであるが、成虫は力が強く、資源量の少ない樹液をエサとしているため、在来のクワガタを排除している可能性が高いと考えられる。沖縄県では沖縄固有のカブトムシの生存が脅かされていると聞く。

丸瀬布町や美幌町では、①外来種だから逃がさないように②弱っても、最後、死ぬまで飼おうなどと呼びかけている。浦幌町でも甲虫類を販売している店があるが、クワガタに限らず販売に当たってはそのような呼びかけを期待したい。

セイヨウオオマルハナバチ（カテゴリー区分　A1、外来生物法の特定外来生物）

2010年9月23日　豊北海岸
撮影者　円子紳一

ヨーロッパが原産地の本種は、1991年に静岡県農業試験場で初めて導入され、1992年頃から温室トマトの授粉用に大量に輸入され始めた。

7年前の1996年に北海道門別町で、最初の野外での定着が確認されてから、現在は日本では北海道に定着しているとされている。また、2007年までに27都道府県で目撃されている。

浦幌町では、2009年と2010年に和歌山満氏（浦幌町）によって厚内で確認された記録がある。

本種は2006年9月1日に特定外来生物（外来生物法）に指定され、飼養、運搬、保管等が禁止された。ただし、トマト農家が授粉に利用する場合は、外来生物法に基づき飼養等許可を受けて引き続き使用することができる。

セイヨウオオマルハナバチが与える影響としては、①本種の特徴的な習性である盗蜜行動（花筒の長い花に穴を開けて蜜を採取する）によって、授粉が阻害され植物の種子生産量を低下させる、②在来のマルハナバチ類が駆逐される危険性（本種の女王が在来種の巣に侵入して、在来種の女王を刺し殺し巣を乗っ取る）、③在来種との交雑による遺伝子の汚染（異種間交配により在来種はメスを産むことがで

きなくなり、不妊化する)、④体内寄生するマルハナバチポリプダニによる病害、などが憂慮されている。

このため、本種の駆除は喫緊の課題であり、2004年には日高地方南部の武川町と厚真町で市民参加による排除活動が行われ、2007年から北海道ではボランティアで参加する「セイヨウオオマルハナバチバスターズ」を募集し、防除活動を行っている。

ハイコウリンタンポポ（カテゴリー区分　未登載）

本種は比較的新しく定着したと思われる外来種で、道内数カ所で確認されている。ヨーロッパ原産で、輸入品目への混入や法面緑化施行における逸出が考えられていて、浦幌町では東山にある無線施設の敷地内に密生している。

2012年6月29日　東山
撮影者　円子紳一

2006年に遠軽町で初めて採集され、その後苫小牧港、札幌ドームなどで採集が相次ぎ、十勝では2011年に帯広市、幕別町からも確認された。北見市、音更町などでも確認されていて、浦幌町での確認は道内で8番目となる。

本種は大量に種子を生産し飛散させることから、繁殖力は旺盛と予測されており、地中に主根を延ばしたり、ストロンを伸ばして増殖する陣地強化型雑草とされている。

なお、本年（2013年）には標本を作成した後に、土地所有者の合意を得て本種の抜き取りなど駆除を行いたいと考えている。

今回の発見は、春日基江氏（浦幌町）の情報提供と持田誠博士（帯広百年記念館学芸調査員）の同定によるものであり、ここに記して感謝申しあげる。

外来生物法で指定されている浦幌町の外来種

外来生物法では、①特に問題の大きな外来種を指定し、運搬や飼養等を規制するとともに防除を推進する=特定外来生物、②外来生物法による法規制ではないが、生態系に悪影響を及ぼしうる外来種を選定し、個人や事業者に対して適切な取り扱いを呼びかけている=要注意外来生物とがある。

浦幌町の外来種としては、特定外来生物にセイヨウオオマルハナバチ、オオハンゴンソウの2種、要注意外来生物にはニジマス、オオアワダチソウ、アメリカオニアザミ、セイヨウタンポポ、ヘラオオバコ、ブタナ、ハリエンジュ、キショウブ、オランダガラシの9種があげられる。

その他の浦幌町の外来種

「北海道ブルーリスト2010」で記載されていて、浦幌町のリストには掲載されていない外来種が、浦幌町では40種確認されている。

野外で見られるものとしては、アケボノセンノウ、イヌビユ、オランダガラシ（クレソン）、スモモ、ワルナスビ、ビロードモウズイカ、ハキダメギク、ヤブカンゾウ、ヒトフサニワゼキショウ、アレチマツヨイグサ、ノラゴボウの11種類がある。

農業で栽培されているものとしては、ダッタンソバ、ニンニク、ナガイモの3種類がある。

家庭菜園で栽培されているものとしては、マルスグリ（グースベリー）、パセリ、カミツレ（カモミール）、シソ（アカジソ）の4種類がある。

花壇で栽培されているものは、マツバボタン、セキチク、ニワナズナ（アリッサム）、ワスレナグサ、シバザクラ、オオセンナリ、ホオズキ、キンギョソウ、キツネノテブクロ（ジキタリス）、ヒナ

ギク（デージー）、ヤグルマギク（ヤグルマソウ）、ヒマワリ、ドイツスズラン、ヒヤシンス、ムスカリ、チューリップ、スイセン、クロッカス、ムラサキツユクサ、イチョウ、ドクダミ、フキ（キョウブキ）の22種類がある。

完全な調査をしたものではないので、この他にも確認されるものがあると考えている。

浦幌町への侵入が心配される外来種

現在は浦幌町での生息・分布が確認されていないが、道内各地に生息域を拡大している外来種も確認されている。

特に自力で移動する動物の中でも、外来生物法の特定外来生物として指定されているウチダザリガニ、アライグマ、ミンクの3種については、近隣の町で生息が確認されており、浦幌町への侵入も十分に考えられる。もしかしたら、既に侵入していても確認されていないだけなのかも知れない。

ウチダザリガニ（カテゴリー区分　A1、外来生物法の特定外来生物）

本種はアメリカのコロンビア川周辺が原産地であり、1926年から1930年にかけて北海道のほか1都1府21県に農林省水産局が優良水族導入（食用）として移入した経緯がある。

1930年に食用として摩周湖に導入され、そこから持ち出された個体の放逐により分布を拡大しているとされる。

現在は北海道東部と北部を中心に分布しており、十勝では豊頃町、本別町、上士幌町、鹿追町、音更町、帯広市、中札内村の7市町村で確認されており、十勝川水系をたどって浦幌町へ侵入することもあり得ることである。

ウチダザリガニは体長15cm以上になり在来のニホンザリガニの2倍ほどに成長し、①ニホンザリガニとの餌や生息地の競合に加えて、ニホンザリガニそのものを捕食すること、②水カビ菌（ザリガニペスト）の保菌者となり、在来種に感染させる可能性がある。ニホンザリガニが感染すると100%致死することが知られている。また、然別湖では北海道指定の天然記念物のミヤベイワナ（オショロコマの亜種）を脅かしていたり、阿寒湖では国指定の天然記念物のマリモに穴を開けるなど生態系への影響もでている。

このようなことから、十勝エコロジーパーク（音更町）、然別湖（鹿追町）では駆除活動が行われている。もしもウチダザリガニをどこかで発見したら、公的機関へ連絡してほしいものだ。

アライグマ（カテゴリー区分　A1、外来生物法の特定外来生物）

本種は北アメリカが原産地で、国内ではペットとして普及した個体が野生化して生息するようになった。北海道で生息が確認された市町村数は140市町村（2012年8月末現在）となり、十勝では14市町村となっている。

アライグマによる被害としては、トウモロコシやメロン、スイカなどの農作物食害が一番に挙げられるが、デントコーンやビート、ロールパックサイレージの被害、乳牛の乳首が噛み切られるなど浦幌町の農業に共通する項目でも被害が報告されている。

また、野幌森林公園では、浦幌町の鳥として指定しているアオサギが、アライグマが原因でコロニーを放棄する事態となっていて、もし、浦幌町に侵入してきたなら、直ちに駆除体制を整える必要があると考える。

ミンク（カテゴリー区分　A1、外来生物法の特定外来生物）

本種の原産地も北アメリカである。日本では1920年代後半に毛皮をとる目的で北海道に持ち込まれた。その後1960年代以降に逃げ出した個体が野生化して生息するようになった。道外でも宮城県など数県で定着が確認されている。

甲殻類や魚類などの水生生物を捕食するが、小型哺乳類やタンチョウのヒナを捕食したり、在来種のイタチ類を駆逐するなど生態系への影響が心配されている。

十勝では豊頃町、池田町など13市町村で生息が確認されている。筆者は10数年前に、浦幌十勝川の豊北橋、常室川と浦幌川の合流地点で、全身が黒っぽい動物を目撃したが、大きさから言っても、もしかしたらミンクだったのだろうか。

おわりに

昨年の北海道フラワーソンへの参加、帯広百年記念館の移動展「博物館は、なぜ標本を集めるのか？標本からわかること」の浦幌町立博物館での展示、カブトムシの採集などを通して外来種に対する興味が湧き、「北海道ブルーリスト2010」の存在も知り、若干であるが浦幌町に関わる外来種を紹介することとした。

山あり、川あり、海あり、湿原も沼もと恵まれた環境の浦幌町には、まだまだ知られざる自然の魅力が眠っている。ひとつづつでも、ひも解く楽しみに溢れている。いざ、フィールドへ。

参考文献

北海道（2010）「北海道の外来種リスト」 ― 北海道ブルーリスト　2010 ―
白水　隆（2011）「日本産蝶類標準図鑑」 第3刷
円子紳一（1981）「浦幌町で採集された蝶」〔浦幌町郷土博物館報告　第18号〕
荒川和子（2001）「浦幌町郷土博物館所蔵の2000年度採集の蝶標本」〔浦幌町立博物館紀要　創刊号〕
上野雅史（1999）「オオモンシロチョウについての一考察（第4報）オオモンシロチョウの分布拡大について」〔やどりが　182号〕
岡野哲郎（2001）「北海道十勝地方におけるオオモンシロチョウの記録」〔やどりが　189号〕
丸瀬布町昆虫生態館（2012）「北海道のカブトムシの実態」
和歌山満（2001）「厚内（浦幌町）の野生ハナバチ相と外来種セイヨウオオマルハナバチについて」〔浦幌町立博物館紀要　第11号〕
小島　望（2006）「市民ボランティアによるセイヨウオオマルハナバチ排除活動:セイヨウオオマルハナバチ排除活動から今後の外来種対策を考える」〔保全生態学研究　第11巻第1号〕
北海道環境生活部自然環境課「セイヨウオオマルハナバチのページ」〔http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/skn/alien/seiyo/seiyo_top.htm〕
持田　誠（2012）「帯広市新産外来種ハイコウリンタンポポ *Hieracium pilosella L.*」〔帯広百年記念館紀要　第30号〕
植田国夫（1981）「植物の生育と環境」〔浦幌町郷土博物館報告　第17号〕
和歌山満（1992）「植物の花期を基調にした厚内の季節」〔浦幌町郷土博物館報告　第40号〕
中川公郎（1993）「浦幌町豊北海岸の主な植物の概要～主として海浜植物～」〔浦幌町郷土博物館報告　第41号〕
浦幌野鳥倶楽部（2009）「浦幌鳥類目録」 第2版
北海道新聞社（2010）「北海道の野鳥」 3刷

浦幌町におけるヒグマ駆除数の推移II（1967～2012年）

佐　藤　喜　和
（日本大学生物資源科学部）

はじめに

浦幌町ではヒグマ（*Ursus arctos*）による農地や集落付近への出没と農作物への被害が多発しており、その対策としての有害駆除が行われている。しかしこのような軋轢が多発するようになったのは比較的最近のことである。佐藤（2003）は、浦幌町における1967～2001年までのヒグマの駆除数の推移について報告し、そのトレンドから四つの時代に区分した。すなわち、駆除数が少なかった1967～1971年の5年間（I期、年平均駆除数2.4）、駆除数が高い水準にあった1972～1983年の12年間（II期、年平均駆除数4.9）、駆除数が低い水準となった1984～1995年の12年間（III期、年平均駆除数2.3、再び駆除数が高い水準となった1997～2001年の6年間（IV期、年平均駆除数6.0）である。この傾向は、I期を除けば北海道全体での駆除数の推移とほぼ同じ傾向にあった（北海道、http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/skn/grp/01/higuma/hokakusu_higai_h250131.pdf）。II期からIII期にかけての捕獲数の減少は生息数の減少に伴うものと解釈され、1990年前後の狩猟・駆除に関する法や制度の改正に結びつき、また北海道がヒグマの科学的な保護管理をめざす転換点となった（Mano & Moll 1999）。

しかしIV期に入り、浦幌町をはじめ道内各地で出没や食害などの軋轢が顕在化し（北海道環境科学研究センター 2000；Sato et al. 2005）、これらの軋轢を軽減する目的で駆除数も増加した。浦幌地域におけるヒグマの生態研究から、IV期にみられる駆除数の増加は軋轢の増加に対応するものではあるが、ヒグマの生息数の増加によるという証拠はなく、むしろ行動の変化によるものと考えてきた（Sato 2002；Sato et al. 2004；2008；2011）。特に、夏季に農地やその周辺部を利用する個体が多いこと、その背景には農作物の分布だけでなく、農地周辺部に有害駆除されたエゾシカ（*Cervus nippon yesoensis*）の死体が分布すること、連続した森林の奥地からオス個体が分散・移動してくることが影響していることを指摘してきた。

浦幌町におけるヒグマによる軋轢は、IV期以降減少する気配が見られない。前報（佐藤 2003）から10年経過し駆除に関する情報が蓄積されてきたことから、ここに改めてその後の捕獲数の推移を検討し、浦幌町におけるヒグマとの軋轢の管理の現状を整理するとともに今後の管理のあり方について考える。

資料と方法

資料

昭和42年（1967年）から平成13年（2001年）までは、浦幌町役場産業課林務係にて収集したヒグマ駆除実績表に記載されている情報をもとに整理した。北海道は1990年以降、全道一律の書式を用いてヒグマの捕獲情報を収集している。2002年以降は、浦幌町役場産業課林務係が控えとして保存しているこの書類をもとに、特に様式２の「ヒグマ捕獲票」の情報を記録した。またヒグマは狩猟獣であり、10月1日から1月31日までの期間で捕獲可能である。狩猟期間には道内他市町村や道外からの狩猟者も浦幌町内でヒグマを捕獲することができる。狩猟者は狩猟期間終了後の

狩猟許可証返納時に捕獲実績とともにヒグマの捕獲地点などの情報を北海道に提供することが求められている。そこで、北海道総合研究機構環境科学研究センターのヒグマデータベースをもとに、浦幌町内で狩猟捕獲された個体の情報についてもまとめた。ただし狩猟による捕獲個体のデータ提供率は低いと予想され、浦幌町内における狩猟実態については十分に把握しきれていない可能性がある。

年齢・性別・地区区分

前報（佐藤 2003）では、年齢性別区分を３つ、すなわちオス成獣、メス成獣、幼獣に区分した。捕獲票に記載される推定年齢と推定体重には実年齢、実測体重と開きがあり、経験的に多くの場合過大評価となることから、幼獣は推定年齢3才以下の個体とし、４才以上の個体を成獣とした。本研究では、より詳細な駆除個体の分析を行うために、親と行動を共にしている個体を「幼獣」、親から離れてから実質的に繁殖するようになるまでの齢クラスを「亜成獣」、繁殖齢以降の個体を「成獣」とし、亜成獣と成獣には性別も加え、５つの性齢クラスに区分した。捕獲個体の計測値、推定年齢には誤差が含まれることから一律の基準を設けることはできなかったが、実態に即した区分となるように各捕獲個体のクラスへの分類は以下の基準により行った。幼獣は、雌雄共に推定体重30kg未満の個体とした。オス成獣は推定体重150kg以上の個体とし、このうち推定年齢3才の個体（1例）および前掌幅11cmの個体（1例）は亜成獣に区分した。この他の推定体重が30kgより大きく150kgより小さい個体はオス亜成獣とした。メス成獣は、推定体重125kg以上の個体とし、このうち推定年齢3才かつ体長120cmの1個体は亜成獣に区分した。このほかの推定体重が30kgより大きく125kgより小さい個体はメス亜成獣とした。ただし、前掌幅11.5cm以上または推定年齢4才の7例は成獣とした。

駆除が行われた地点を、駆除実績表および捕獲票に記載された情報を基に地区別にまとめた。このうち、恩根内奥にある地番図上の炭山については、本研究の目的に即して恩根内として扱った（2009-2012年に駆除された5例）。

結果と考察

性齢クラス別捕獲頭数

1967～2012年までの総捕獲頭数は221頭（オス123頭、メス95頭、不明3頭）、このうち狩猟が13頭、列車事故が1頭だった。1967-2001年の駆除実績および1990～2000年の狩猟実績に関しては佐藤（2003）に示したため、本稿では2002～2012年までの駆除実績と2001～2011年までの狩猟実績について表１、２にまとめた。捕獲個体の情報を年齢性別クラス毎に分類した結果、幼獣は10頭（オス6、メス4）で、推定年齢は0～2才、体長75～100cm、前掌幅7-9cmであった。オス亜成獣は64頭（狩猟を除くと61頭）で、推定年齢は1～8才、体長は80～200cm、前掌幅は9～14cmであった。オス成獣は53頭（狩猟を除くと51頭）で、推定年齢は4～24才、体長は130-280cm、前掌幅は12-18cmであった。メス亜成獣は45頭（狩猟を除くと42頭）で、推定年齢は1～6才、体長は100～300cm、前掌幅は11～17cmであった。メス成獣は46頭（狩猟を除くと43頭）で、推定年齢は4～12才、体長は134～180cm、前掌幅は10-13cmとなった。

駆除個体の年齢クラスの推定には誤差が含まれる。特に推定体重は見た目の推定であり、報告者の経験に左右されやすい。駆除が行われる場合、駆除後の個体の洗浄や記録用写真の撮影のためにトラクタなどで個体をつり下げる事が多い。より正確な実測体重を測定するため、北海道は、

駆除を担当する猟友会または駆除担当班ごとに体重計を配付しておくなどするとよいのではないだろうか。北海道が計測を指導している体長、胸囲、および体高に関しては近年ほぼ確実に計測されており、これらは年齢クラスや個体の状態を判断するのに重要である。また浦幌町では前掌幅の計測も行われている。前掌幅は測定誤差が少なく、また年齢性別クラスによる違いを判定しやすい。今後も計測を継続していただきたい。また他の市町村でも同様に実施することが望ましい。正確な測定のために計測法の講習会などを実施するとより効果的であろう。

表１．浦幌町におけるヒグマの駆除実績，2002―2012年.

年	月日	地区	性別	推定年齢	推定体重(kg)	体長(cm)	胸囲(cm)	体高(cm)	掌幅(cm)	箱ワナ
2002	9月21日	活平	♀	6	145	175	—	—	12	✓
2003	7月10日	幾千世	♂	12	300	240	151	140	17	✓
	7月27日	富川	♀	3	70	142	90	70	11	✓
	8月18日	幾千世	♀	4	120	150	86	65	—	✓
	9月21日	常室	♀	3	80	140	74	63	10	✓
	9月25日	川上	♀	3	80	145	75	60	10.5	✓
2004	7月 4日	活平	♂	15	300	210	125	100	—	✓
	8月 2日	福山	♀	3	90	130	80	68	10	✓
	8月19日	栄穂	♂	10	200	185	100	103	—	✓
	9月10日	幾千世	♂	8	180	190	100	85	—	✓
2005	7月 1日	宝生	♂	4	80	144	84	75	12.5	
	7月 7日	活平	♂	13	200	189	115	105	17	✓
	7月 9日	川流布	♂	3	80	130	80	75	12	✓
	7月14日	川上	♂	18	240	203	132	110	16	✓
	7月20日	常室	♀	3	80	150	75	120	10	✓
	7月21日	常室	♂	4	110	150	90	110	11	✓
	7月23日	活平	♂	3	80	152	80	78	12	
	8月 5日	活平	♂	3	80	130	75	64	12	
	9月 2日	活平	♀	4	80	128	71	68	10.5	
	9月 5日	常室	♂	10	200	200	110	80	14.5	✓
	9月18日	活平	♂	6	120	150	74	90	12.5	
2006	7月 7日	川流布	♂	16	200	220	140	110	16	✓
	7月 9日	川上	♂	16	200	232	150	112	18	✓
	8月15日	相川	♀	6	100	180	90	85	12.5	✓
	8月23日	川上	♂	8	130	160	96	90	13	✓
	9月19日	活平	♂	3	70	127	80	70	13	✓
	10月25日	川上	♂	15	250	198	124	114	17	✓
2007	7月 1日	川流布	♂	24	350	230	148	130	18	✓
	7月27日	活平	♀	3	50	121	77	74	10	✓
	8月12日	上厚内	♂	3	120	123	80	70	11	
	8月19日	活平	♀	3	60	140	85	80	10	✓
	8月27日	川上	♂	4	70	130	72	70	11	✓
2008	6月11日	恩根内	♀	6	80	148	88	70	—	✓
	6月27日	川流布	♂	4	75	140	85	73	—	✓
	7月 4日	活平	♂	5	100	150	105	80	14	✓
	8月19日	活平	♂	20	260	190	150	86	16	✓
	8月21日	活平	♀	5	90	130	66	92	11	
	10月 7日	常室	♂	9	250	130	92	66	14	✓
2009	8月12日	活平	♂	3	70	121	70	62	11	✓
	8月16日	活平	♂	3	80	147	83	62	11	
	9月 2日	川上	♀	12	170	170	105	75	17	✓
	9月 3日	幾千世	♀	10	150	165	105	70	11	
	9月 5日	川流布	♂	4	120	145	87	70	12	✓
	9月 6日	恩根内	♀	7	150	162	82	100	13	✓
2010	6月 2日	幾千世	♂	3	80	110	77	60	—	
	6月 2日	幾千世	♂	3	80	120	80	65	—	
	6月23日	恩根内	♂	4	100	150	90	80	—	✓
	7月13日	活平	♂	6	160	185	115	90	15	✓
	8月 8日	恩根内	♀	2	40	110	70	45	10	✓
	8月 8日	幾千世	♂	5	150	140	120	75	11	
	8月24日	活平	♂	4	80	165	86	88	14	✓
	9月 2日	福山	♀	3	100	120	80	60	10	
	9月14日	恩根内	♂	3	50	110	75	60	11	✓
2011	6月 4日	瀬多来	♂	3	50	120	73	50	10	
	6月21日	活平	♂	4	100	145	90	77	14	✓
	6月30日	川流布	♂	3	100	143	91	84	13	✓
	7月 2日	常豊	♂	3	80	105	70	60	10	
	7月 4日	川上	♂	12	300	210	146	105	17	
	7月10日	常豊	♂	3	80	105	72	60	10	
	7月12日	川上	♂	10	250	191	127	90	17	
	7月19日	福山	♂	6	210	187	112	105	15	✓
	7月22日	川流布	♀	4	72	150	90	84	12	✓
	8月 3日	活平	♀	3	37	122	84	57	10	✓
	8月23日	川上	♀	5	110	156	96	81	10	✓
	8月25日	活平	♂	3	60	126	78	62	11	✓
	8月26日	川流布	♀	3	45	140	80	65	12	
	9月 9日	川上	♂	8	200	180	108	91	—	✓
	9月11日	川流布	♀	3	50	128	76	60	11	✓
	10月16日	活平	♀	3	80	130	85	71	12	✓
2012	4月30日	幾千世	♂	6	200	177	115	90	15	
	7月24日	恩根内	♂	3	40	110	58	56	10	✓
	8月 4日	時和	♂	6	250	200	100	90	16	✓
	8月20日	常豊	♀	5	180	180	120	80	15	
	8月26日	活平	♀	4	150	160	100	88	13	✓
	9月 8日	活平	♀	1	20	100	50	60	8	✓

表２．浦幌町におけるヒグマの狩猟実績および列車事故，2001～2012年.

年	月日	地区	性別	推定年齢	推定体重 (kg)	体長 (cm)	胸囲 (cm)	体高 (cm)	掌幅 (cm)	区分
2002	10 月 17 日	幾千世	メス	3	90	—	—	—	—	狩猟
2004	10 月 28 日	留真	メス	5	150	—	—	—	—	狩猟
2005	10 月 30 日	上厚内	不明	6 ～ 7	200	—	—	—	—	列車事故
2005	11 月 15 日	富川	メス	3	150	120	100	70	—	狩猟

駆除数の推移

1967-2012年までの46年間に浦幌町内で207頭（年平均4.5頭）のヒグマが駆除された。捕獲数は年により大きく変動した。年変動の影響を除去して長期的な変動傾向を把握するため、駆除実数と前後3年間の移動平均も同時に図１に示した。捕獲数のトレンドから、佐藤（2003）が示した捕獲数の少ない時代（I期）、獲数が多い時代（II期）、捕獲数が少ない時代（III期）に加えて、IV期も12年間で区切り、1990年代後半以降捕獲数が増加する時代（1996年-2007年）と区分した。この間の年平均捕獲頭数は6.8頭となった。さらに近年の捕獲数がさらに増加または高めの値で安定する時代をV期（2008-2012年、年平均捕獲頭数8.6頭）に便宜的に区分した。1990年代後半以降、強い駆除圧をかけ続けてきたが、駆除数はさらに増加を続けている。このことは、農地や集落付近へのヒグマの出没が減少していないことを示している。そのため、地域住民からすれば、駆除を続けても出没が収まらないほど多くのヒグマが生息している（または増えている）という印象に結びついていると思われる。しかし、1978年と2000年の森林内のヒグマの痕跡密度の比較からは、むしろ密度が低下したという結果が得られている（Sato et al. 2004）。また2005年にも同様の調査を実施したが、2000年時点と比較してほぼ同水準であることが確かめられている（佐藤ほか 未発表資料）。森林内でヒグマの生態調査している感覚からも、他の高密度生息地（知床半島や富良野市、国後島や択捉島）に比較して決して生息密度が高いという印象は受けない。

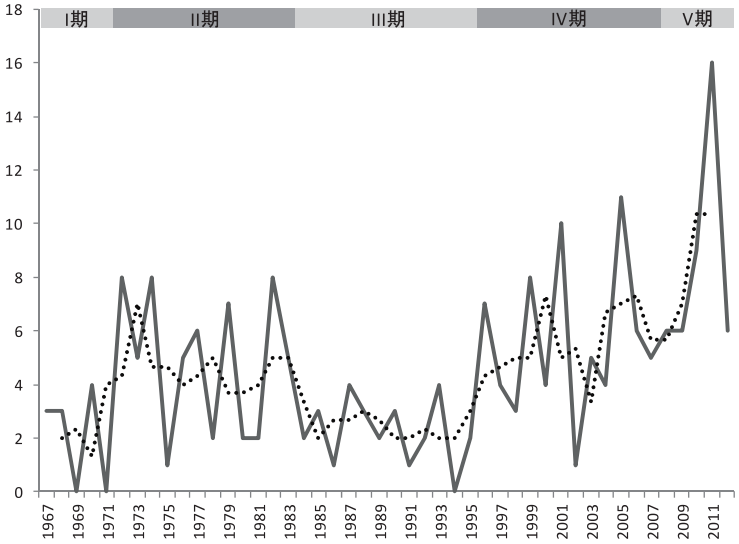


図１．浦幌町におけるヒグマ駆除頭数の推移，1967～2012年．実線は駆除実数を，点線は前後3年の移動平均を示す.

捕獲法別にみた駆除数の推移

捕獲方法別駆除数を図2にまとめた。捕獲統計開始当初は銃による駆除のみが行われており、箱ワナを用いた駆除が行われるようになったのは1985年以降である。先に示した時代区分ごとに見ていくと、IV期以降安定して箱ワナによる捕獲が行われるようになった。I-II期は銃

表３．ヒグマの性齢クラス別捕獲方法別駆除数，浦幌町，1996～2012年.

方法	幼獣	♂		♀	
		亜成獣	成獣	亜成獣	成獣
銃	1	13	5	7	5
箱ワナ	4	20	27	16	13

による捕獲の時代、III期は箱ワナを使い始めたが銃でも箱ワナでもあまり捕獲しなかった時代、IV期は箱ワナでの捕獲数が急増した時代、V期は箱ワナに加えて銃による捕獲も増加した時代と読み取れる。箱ワナ駆除が盛んになったIV期以降に駆除された111頭について捕獲法別にみた捕獲個体の性齢クラスには、雄成獣が箱ワナでより捕獲されやすい傾向が見られたものの、有意な差は見られなかった（表3、Fisherの正確確率検定、$P = 0.0929$）．駆除数が増加している背景には、捕獲方法の変化が影響しており、箱ワナの利用が影響していると考えられる。

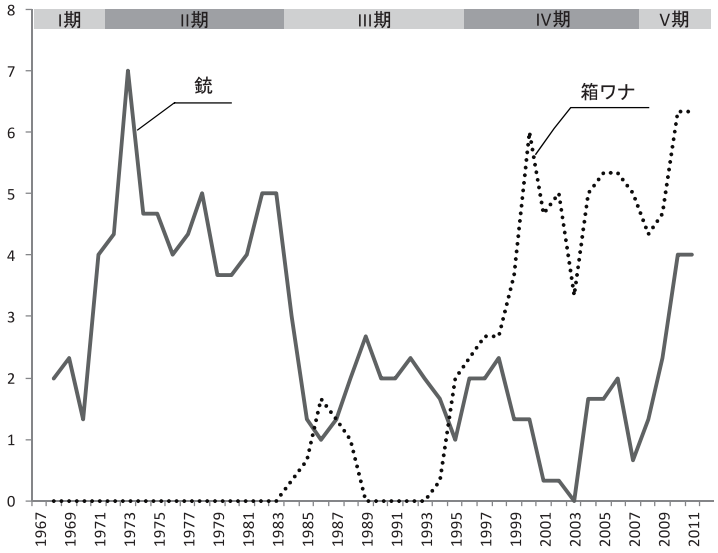


図２．捕獲方法別にみたヒグマ駆除頭数の推移，浦幌町，1967～2012年．値は前後3年の移動平均値．実線は銃による駆除数を，点線は箱ワナを用いた駆除数を示す．

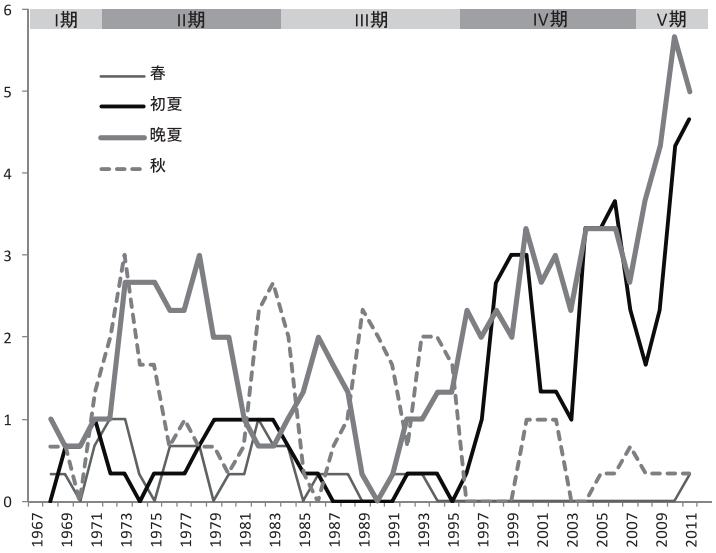


図３．季節別にみたヒグマ駆除頭数の推移，浦幌町，1967～2012年．値は前後3年の移動平均値．

季節別にみた推移

捕獲された季節を、3-5月を春、6-7月を初夏、8-9月を晩夏、10-1月を秋の4つの季節に区分して、年ごとの推移を見た（図3）。46年間の捕獲数は春が12頭、初夏が55頭、晩夏が97頭、秋が43頭となった。晩夏は最も捕獲数が多く、年間捕獲数の推移と同じような動向を示した。晩夏に捕獲が多いのは、農作物の利用可能量が大きくなる季節であり、浦幌町（浦田 2005）、および全道で（Sato et al. 2005）、ヒグマによる農作物への食害が大きくなる季節である。この季節は、春から夏にかけての主要採食物である草本類の利用価値が減少し、

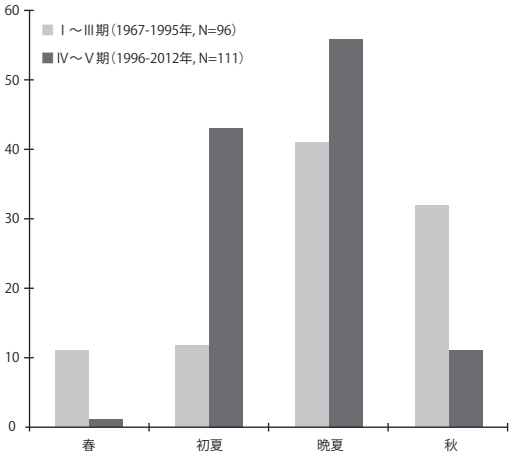


図４．ヒグマの駆除が実施された季節の捕獲数増加以前と以後の比較．浦幌町．1967-2012年

秋の主要採食資源である果実類が熟す前の移行期に当たるために被害が増加する（佐藤、2005）。春の捕獲数は、春季ヒグマ予察駆除が廃止された1990年以前に主に行われた。秋の捕獲はI～III期に多く、IV～V期には減少した。逆に初夏の捕獲数はI～III期に少なく、IV～V期に急激に増加しているのが特徴的であった。近年の捕獲数の増加は、この初夏の捕獲数増加によるところが大きいといえる。捕獲数増加が顕著になった1996年以降とそれ以前とで捕獲数の季節変化を見るとその差はよりわかりやすい（図4）。春季ヒグマ予察駆除の影響を除外するため、初夏、晩夏、秋の3つの季節でカイ二乗検定の結果、二つの時代間で捕獲されるパターンには有意な差が見られた（$\chi^2 = 27.2916, df = 2, P < 0.0001$）。

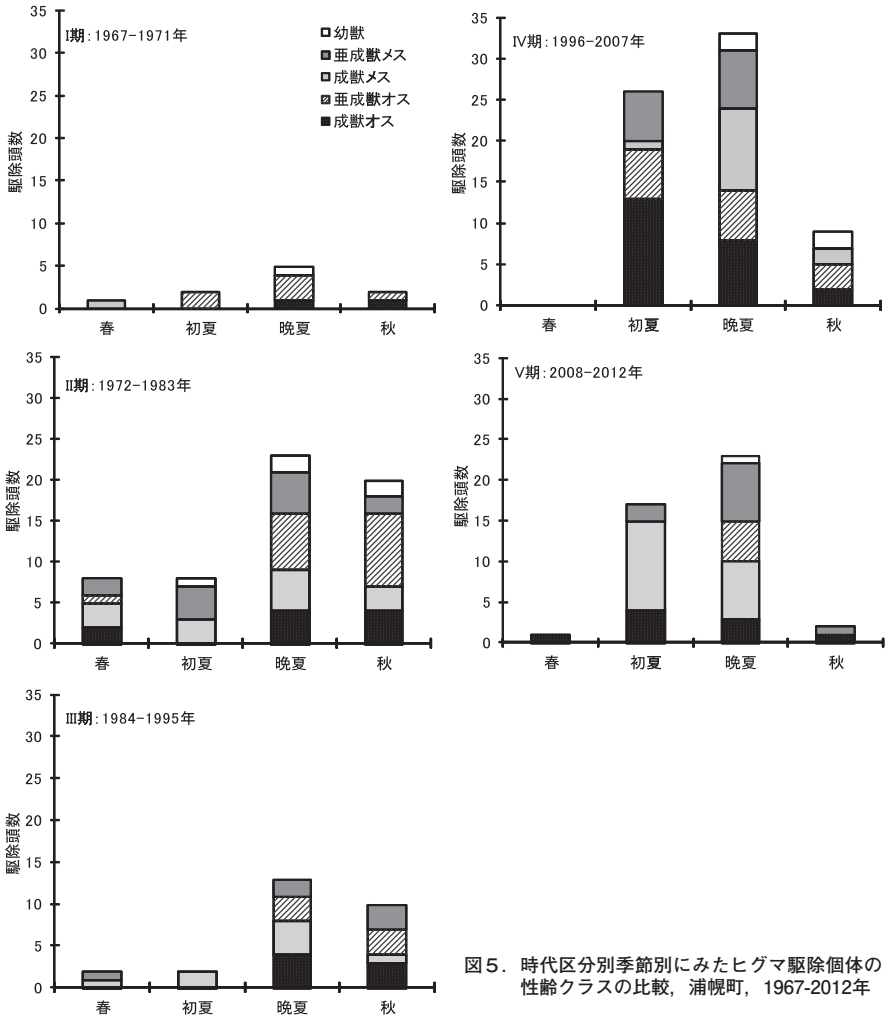


図５．時代区分別季節別にみたヒグマ駆除個体の性齢クラスの比較，浦幌町，1967-2012年

時代区分別季節別に捕獲個体の性齢クラス比をみると、III期までは初夏の捕獲は亜成獣と幼獣のみであった（図5）。一方IV期以降には、初夏にオス成獣の捕獲数が大きく増加している事がわかる。V期に入ってふたたびオス亜成獣の捕獲割合が増加しているが、まだオス成獣の捕獲も継続している。

地区別にみた駆除数

駆除地点を地区別にまとめた。1967～2012年までに駆除された207頭の駆除地点の分布を見ると、市街地中心部から南西部を除くと、池田町と接する西部から太平洋沿いの地域まで広い範囲で駆除が行われているが、集中しているのは北東部であるのが分かる（図6-a）。これは、北東部が阿寒湖まで繋がる白糠丘陵の縁にあたっており、連続的なヒグマの分布域となっているためである（北海道環境科学研究センター 2000）。これを年代別に、近年の駆除数急増前（I～III期：1967～1995年）と後（IV～V期：1996～2012年）に分けると、近年の駆除およびその原因となる軋轢の発生地点

が伺える。どちらの時代も駆除総数は同程度である。駆除数が急増する以前には、北東部に多いものの特定の地域に集中する傾向がなく、広範囲で駆除が行われていた様子がうかがえる（図6-b）。一方駆除数急増後には、活平、川上で特に多くの駆除が行われたことが分かる（図6-c）。駆除方法別にみると、北東部のうち活平以北で箱ワナによる駆除が多く実施されている一方、留真以南では常室を除き主に銃による捕獲が行われていることがわかる。箱ワナの利用は駆除数急増と同じ時期であり（図2）、駆除数の多い地域は箱ワナ駆除の多い地域とほぼ一致していた。

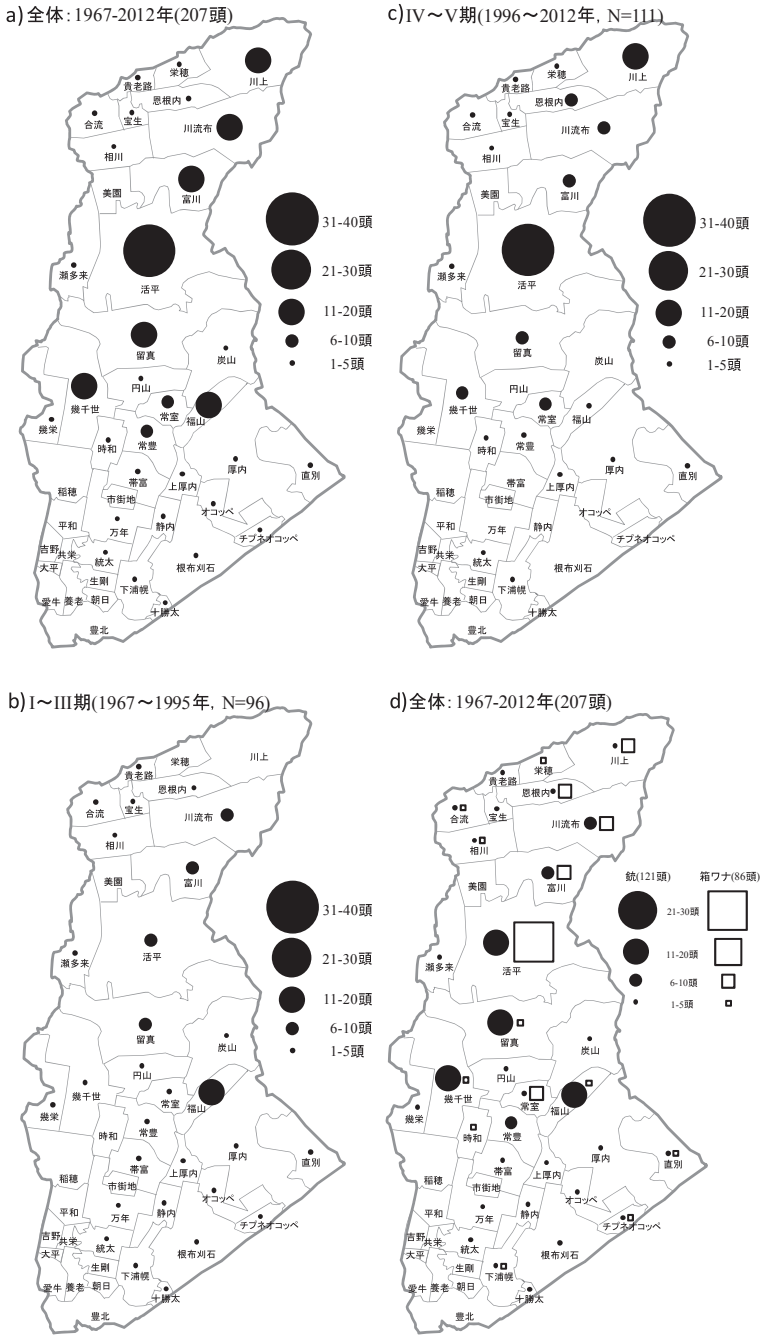


図6．地区別に見たヒグマの駆除地点，浦幌町，1967～2012年．a)全体，b) 1967～1995年，c)1996～2012年，d)捕獲方法別.

まとめ

浦幌町において1990年代後半以降急増している駆除数は、15年以上経過しても高い値で推移していた。その特徴は、箱ワナによる駆除が多いこと、晩夏に加えて初夏の駆除が増えていること、初夏には亜成獣だけでなくオス成獣の駆除数が増加していること、および駆除は北東部で多く行われていることであった。これらをまとめると、初夏に箱ワナで駆除されるオス成獣が、近年の駆除数増加を特徴付けていると考えられる。

オス成獣はヒグマの社会ではもっとも優位であり、安全で質の高い生息地を選択して利用することが知られている（Blanchard & Knight 1991）。浦幌町のヒグマは阿寒湖から延びる白糠阿丘

陵を中心に分布する阿寒白糠地域個体群の一部であると見ることができる（Itoh et al. in press）。初夏にオス成獣の捕獲が増えるということは、オス成獣にとって初夏の浦幌町の農地周辺が、高い駆除圧にもかかわらず、この阿寒白糠地域の中でもっとも安全で質の高い生息地であると認識されているのではないだろうか。

1996年以降初夏に捕獲数が増加した原因の一つとして、浦幌町ではヒグマによるビートの食害が6月下旬からはじまること、シカの個体数増加と農作物への食害増加によりシカの駆除数も増加し、ヒグマがその死体を利用していることが影響していると考えられる（Sato et al. 2004；佐藤 2007）。また初夏はヒグマの繁殖期でもある（坪田ほか 1985）。繁殖期には、オスは交配相手を求めて広い範囲を動き回ることが知られている（Blanchard & Knight 1991；Dahle & Swenson 2003）。

Sato et al.（2011）は、駆除個体のmtDNA多型解析による出生地推定を行い、浦幌町で駆除されているオスの多くが足寄町東部から白糠町北部にかけての地域で生まれ、浦幌町に移動してきた個体であることを示した。この結果を総合して、アトラクティブ・シンク（駆除される危険が高いがそれに気がつかず餌などの豊富な魅力的な場所に集まってしまうこと）という概念を用いた仮説を立てた。すなわち、初夏の農地とその周辺には農作物（ビート）とシカの駆除死体が分布しており、前年の駆除により競争相手となるヒグマも除去されているため、採食資源を得るためにも、繁殖のための交配相手を探すためにも魅力的な場所となっている。実際、足寄町東部から白糠町北部にかけての地域で生まれ浦幌町に移動してきた個体が浦幌町で生まれた雌と繁殖している証拠も得られている（Itoh, et al. 2012）。危険要因である人間による駆除圧は、箱ワナが設置されているだけであり、その危険を学習することが困難である。箱ワナに入ってしまえば、危険を知ったとしても次の行動に活かすことはできず駆除されるだけである。こうして毎年初夏になると、採食資源と交配の機会を求めて阿寒白糠地域の奥地からヒグマが移動して来る。地元の農家から見れば、駆除を続けてもヒグマの出没は収まらず、いくら駆除してもヒグマは減らない、たくさんのヒグマがいるに違いない、と解釈されているのではないだろうか。

ヒグマのオスは、親から離れた後、出生地から分散することが知られている（Blanchard & Knight 1991；Dahle & Swenson 2003）。分散する亜成獣にとって駆除により個体の除去が盛んな浦幌町の農地周辺は優位な個体が少なく好適な生息地に見えるかもしれない。これもまたオス亜成獣が浦幌町に出没を続ける原因となっているのではないだろうか。

謝　辞

本稿をまとめるにあたり、浦幌町役場産業課林務係の皆様には、駆除があるごとに個体に関する情報を提供していただいた。日本大学生物資源科学部森林動物学研究室の学生および浦幌ヒグマ調査会の皆さまには、これらの情報収集にご協力いただいた。北海道総合研究機構環境科学研究センターには、データベースに登録されている狩猟個体に関する情報を閲覧させていただいた。ここにお礼申し上げる。なお本研究はJSPS科研費23380089の助成を受けて実施した。

引用文献

Blanchard, B.M. & Knight, R.R.（1991）：Movements of Yellowstone grizzly bears. *Biological Conservation*, 58：41-67.

Dahle, B. & Swenson, J.E.（2003）：Seasonal range size in relation to reproductive strategies in

brown bears *Ursus arctos*. *Journal of Animal Ecology*, 72：660-667.

北海道環境科学研究センター.（2000）：ヒグマ・エゾシカ生息実態調査報告書 IV．野生動物分布等実態調査（ヒグマ：1991～1998年度）．北海道環境科学研究センター、札幌．118+21pp.

Itoh, T., Sato, Y., Kobayashi, K., Mano, T. & Iwata, R.（2012）：Effective dispersal of brown bears（*Ursus arctos*）in eastern Hokkaido, inferred from analyses of mitochondrial DNA and microsatellites. *Mammal Study*, 37：29–41.

Itoh, T., Sato, Y., Tsuruga, H., Mano, T., Kohira, M., Yamanaka, M., Kasai, S., Kobayashi, K. & Iwata, R. Estimating the population structure of brown bears in eastern Hokkaido based on microsatellite analysis. *Acta Theriologica*, in press. DOI 10.1007/s13364-012-0095-8.

Mano, T. & J. Moll.（1999）：Status and management of the Hokkaido brown bear in Japan. pp128-130. *in* C. Servheen, S. Herrero, & B. Peyton compilers "Bears. Status survey and conservation action plan". IUCN/SSC Bear and Polar bear specialist groups. IUCN. Gland, Switzerland and Cambridge, UK. x + 309pp.

Sato, Y.（2002）：An ecological study on human-bear conflicts in Urahoro, Hokkaido. Ph.D thesis. The University of Tokyo. 91pp.

佐藤喜和.（2003）：浦幌町におけるヒグマ駆除数の推移．浦幌町立博物館紀要 3：27-35.

佐藤喜和.（2005）：ヒグマの食性．地域による違いと年変動．哺乳類科学、45：79-84.

佐藤喜和.（2007）：浦幌町におけるエゾシカの個体数の急増とその後の推移. 浦幌町立博物館紀要、（7）：23-28.

Sato, Y., Aoi, T., Kaji, K. & Takatsuki, S.（2004）：Temporal changes in the population density and diet of brown bears in eastern Hokkaido, Japan. *Mammal Study*, 29：47-53.

Sato, Y., Itoh, T., Mori, Y., Satoh, Y., & Mano, T.（2011）：Dispersal of male bears into peripheral habitats inferred from mtDNA haplotypes. *Ursus*, 22：120-132.

Sato, Y., Kobayashi, Y., Urata, T. & Takatsuki, S.（2008）：Home range and habitat use of female brown bear（*Ursus arctos*）in Urahoro, eastern Hokkaido, Japan. *Mammal Study*, 33：99-109.

Sato, Y., Mano, T. & Takatsuki, S.（2005）：Stomach contents of brown bears *Ursus arctos* in Hokkaido, Japan. *Wildlife Biology*, 11：133-144.

坪田敏男・金川弘司・高橋健一・安江 健・福永重治.（1985）：エゾヒグマの飼育条件下における性行動の観察. 家畜繁殖誌 31：203-210.

浦田 剛.（2005）：上浦幌地方におけるヒグマの圃場侵入．浦幌町立博物館紀要（5）：16-24.

北海道十勝郡浦幌町に分布する根室層群川流布累層中の白亜紀/古第三紀境界

栗　原　憲　一
（三笠市立博物館）

1．はじめに

6,600万年前の白亜紀／古第三紀境界（K/Pg境界）は、白亜紀最大の生物の絶滅事件が起こった時期である。恐竜（鳥類を除く）やアンモナイト類が絶滅し、海洋プランクトンの浮遊性有孔虫、石灰質ナノプランクトンや浅海に住む動物の大多数の種が絶滅した。その規模は、属レベルで50％にも及ぶ（Russel, 1974）。そして、この絶滅は、直径約10kmの小天体が地球表層に衝突したことによって引き起こされたと考えられている（Schulte *et al.,* 2010）。

一方、北海道十勝郡浦幌町（白糠丘陵地域）には、白亜系～古第三系の海成層である根室層群が広く分布し、川流布（かわるっぷ）層上部泥岩部層中に、世界各地のK/Pg境界にある粘土層に類似した、黒灰色の粘土層が挟在することが、国内で唯一知られている（Kaiho and Saito, 1986）。

浦幌町立博物館では、白亜紀最大の絶滅事件が起こったK/Pg境界が町内に存在することを活用して、毎年、その地層を現地観察する体験講座を開催している。そこで本稿では、川流布累層中のK/Pg境界に関する研究の紹介と、K/Pg境界で起こった絶滅事件に関する簡単なレビューを行い、今後の講座資料を作成する際の一助としたい。

2．白亜紀／古第三紀境界の絶滅事件

白亜紀／古第三紀（K/Pg）境界の生物の絶滅事件は、海生無脊椎動物の化石記録から見た5大絶滅の1つとして認識されている（図1）。K/Pg境界で破局的に大量絶滅した生物群については平野・海保（2004）がまとめている。彼らによると、絶滅は、①陸上では恐竜（鳥類を除く100％の種が絶滅）、②海洋表層水に生息する遊泳性のアンモナイト類（100％の種が絶滅）とベレムナイト類（100％の種が絶滅）、浮遊性生物の浮遊性有孔虫類（92％の種が絶滅）、石灰質ナノプランクトン類（88％の種が絶滅）、珪質鞭毛虫類（73％の種が絶滅）、③浅海底生生物の腕足類（77％の種が絶滅）、棘皮類、サンゴ類、二枚貝類、大型有孔虫類などである。一方、K/Pg境界を生き延びた生物

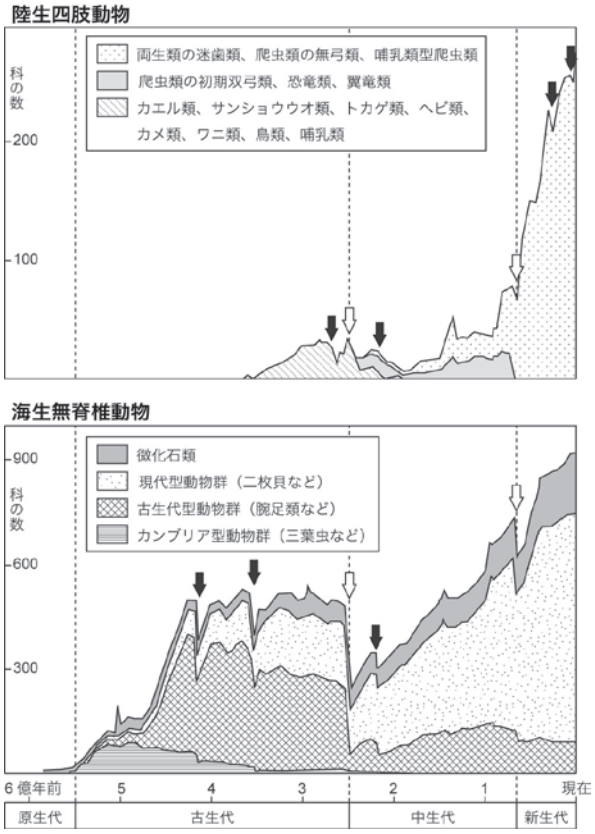


図1　過去6億年の陸生四肢動物と海生無脊椎動物の科の数の変化．Benton（1989）及びErwin（1993）を改変．
図中の矢印が大量絶滅事件を示す．白矢印は，陸上と海洋の生物の絶滅時期が一致するものを示す．K/Pg境界（中生代と新生代の境界）の絶滅事件は，陸上と海洋の両方の生物が同時期に絶滅した．

には、①陸上では植物（コケ植物、シダ植物、裸子植物、被子植物など。地域別データで30～51％の種が絶滅）と25kg以下の小動物（ネズミやモグラに似た哺乳類やトカゲやヘビなどの小型の爬虫類）、②淡水性脊椎動物（ワニ、カメなど。10％の種が絶滅）、③海洋の中・深層水の海底に生息する底性有孔虫類（10％の種が絶滅）、浮遊性で海洋表層～中層に生息する珪質の殻をもつ放散虫類、休眠期細胞をもつ渦鞭毛藻類（35％の種が絶滅）である。つまり、陸上の大型動物と海洋表層（水深約100m以浅）に住む生物が絶滅し、陸上植物、陸上小動物と海洋中・深層水（水深約100m以深）および河川に住む動物が生き残ったという傾向が認められる（平野・海保、2004）。

一方、今から30年以上前、イタリアのK/Pg境界にある粘土層から、小惑星か彗星が地球に衝突したことを裏付ける、多量のイリジウムとその他の白金族元素が発見された（Alvarez *et al.,* 1980）。さらに、マイクロテクタイト、衝撃変成石英などの衝突を裏付ける証拠が世界各地で発見された（Montanari *et al.,* 1983；Bohor, 1990）。

1991年には、メキシコのユカタン半島北端の地下に、K/Pg境界の年代値をもつ直径180～200kmのクレーターとその埋積物が発見され、直径約10kmの小天体が当時浅海であったところに衝突したことが確実となった（Hildebrand *et al.,* 1991）。

モデルシミュレーションからは、この規模の小天体がユカタン半島の浅海域に衝突すると、まずマグニチュード11以上の地震が起こり、周辺海域の沿岸域に大きな津波を引き起こしたと考えられる（例えば、Toon *et al.,* 1997）。そして、大量の塵と水蒸気が成層圏に上がり太陽光が遮断され、光合成の中止、酸性雨、森林火災、気温変化を引き起こす。世界各地のK/Pg境界から見つかったススの化石や燃焼起源の有機物は、衝突時のエネルギーで世界的規模の森林火災が起きたことを示している（Arinobu *et al.,* 1999）。ススは黒いため、岩石の塵よりも効果的に太陽光を遮断するので、光合成の停止と気温低下の可能性を高めたと考えられる。その後（衝突後1000年以内）、今度は森林火災と衝突により放出された二酸化炭素によって温暖化が引き起こされたことが示唆されている（Kaiho *et al.,* 1999）。

では、この小天体の衝突と前述した分類群による絶滅規模の違いとは何か関係があるのだろうか。これについても、平野・海保（2004）が説明している。

まず、当時まだネズミ大のサイズだった哺乳類と小型の爬虫類は、穴に潜り、気温低下、酸性雨、森林火災、暗闇、光合成停止による食物の枯渇などの惨事から逃れられたが、恐竜などの大型動物と海洋表層に住む生物は逃れるすべがなく、それらの大部分は、地球上から姿を消した。陸上と海洋表層の動物は光合成をする1次生産者に直接あるいは間接的に依存しているので、小量の食物で足りる小動物を除き、小天体衝突による光合成の停止により絶滅した。一方、河川の生態系は、河川に1次生産者が少ないため、大部分陸生生物の有機物に依存している。このため、河川の生態系は壊れなかったので、ワニ、カメなどは生き長らえた。酸性雨は、海洋表層の150mくらいまでを酸性化させるが、そこに浮遊する石灰質の微小生物を溶かすことにより中和されてしまい、150m以深の中・深層水にはその影響は及ばなかった。大陸には石灰岩が広く分布していて、酸性雨は石灰岩と中和反応されたため、陸水の生物は生き残れた。光合成の中止は、石灰質ナノプランクトンなどの植物プランクトンと、それを餌にしているか、それと共生している浮遊性有孔虫などの表層水プランクトンに、壊滅的打撃を与えたが、海洋表層から海底に溜まった有機物を食べている底生有孔虫類は生き残れた。酸で溶けない珪質殻からなり、光合成停止と酸性雨の影響が少ない中層水に主に住む放散虫類も生き残れた。浅海に住む腕足類、棘皮類、サンゴ類、二枚貝類、大型有孔虫類などは光合成停止により栄養源を失い、また酸性雨の被害を被った可能性が考えら

れる。休眠期細胞をもつ渦鞭毛藻類は、休眠期細胞の状態で生き延びることができた。陸上植物は、光合成停止、急激な気温変化、森林火災、酸性雨のため絶滅した種もかなりあったが、多くの種は胞子や種子の状態で惨事を生き延びたと考えられる。

3．白糠丘陵地域の根室層群

浦幌町北東部の白糠丘陵地域には、南北約60km、東西数km～10kmにわたり白亜系～古第三系の根室層群が分布している（図2）。本層群の西縁は、東傾斜の逆断層を挟んで古第三系音別層や新第三系川上層群と接する。また、東縁や南縁は古第三系浦幌層によって不整合に覆われる。全層厚は4,000m以上である。下位より、川上累層、川流布累層、富川累層に区分される（西嶋、1964）。その内、白亜紀／古第三紀（K/Pg）境界は、川流布累層中に存在することが知られている。

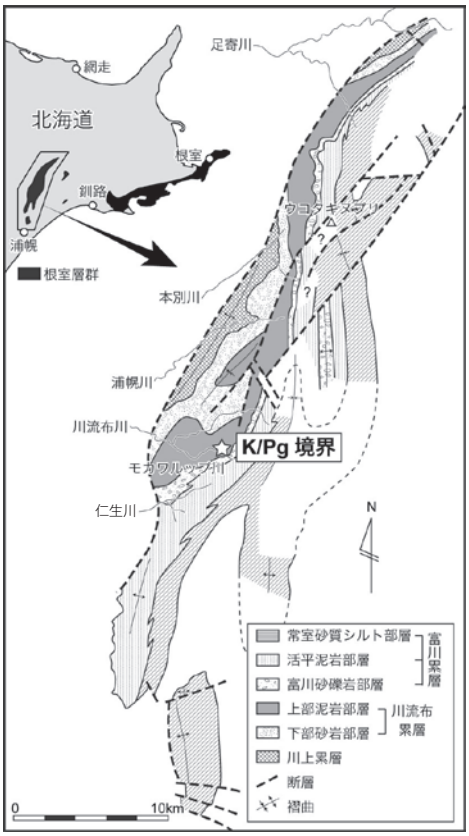


図2　白糠丘陵地域の根室層群. 西嶋（1964）を改変.

3．1．川流布累層（日本地質学会編、2010）

本累層は全体として上方細粒化のシーケンスを示す。下部砂岩部層は砂岩泥岩互層を主体とし、礫質泥岩や凝灰岩を挟在する。互層中の砂岩は級化構造が顕著であり、しばしば底痕を伴い、タービダイト起源であると推定される。底痕からは北からの卓越した軸流と東からの副次的な側方流が測定される。上部泥岩部層は泥岩を主体とし、タービダイト砂岩や凝灰岩の薄層を伴う。本累層の年代は、白亜紀マーストリヒチアン～古第三紀暁新世セランディアン前期である。

3．2．川流布累層中の白亜紀／古第三紀境界

Kaiho and Saito（1986）は、川流布川の支流・モカワルップ川沿いに分布する川流布累層の浮遊性有孔虫群集を検討した結果、上部泥岩部層中（彼らの論文では活平層上部）に白亜紀／古第三紀境界が存在することを明らかにし、同時に、厚さ数cmの世界各地のK/Pg境界にある粘土層に類似した、炭質物に富む黒灰色粘土層が挟在することを発見した（図3）。そして、この粘土層からは微量であるが、イリジウムも発見されている（田崎ほか、1992）。現在の所、国内で唯一知られるK/Pg境界である。

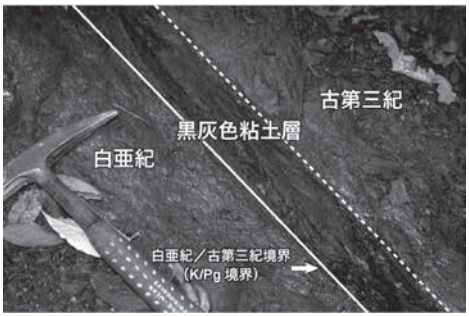


図3　モカワルップ川沿いにある白亜紀／古第三紀境界と黒灰色粘土層.

本地域のK/Pg境界付近では様々な研究が行われ、海外のK/Pgセクションと類似した現象を認めることができる（図4）。

海洋表層に住む浮遊性有孔虫群集は、白亜紀で産出した全ての種がK/Pg境界前で絶滅する一方、海底に棲む底生有孔虫群集はあまり影響を受けず、絶滅率は約23％である（図4）。これは、前述

したように、衝突による光合成停止によって、石灰質ナノプランクトンなどの植物プランクトンと、それを餌にしているか、それと共生している浮遊性有孔虫などの表層水プランクトンに、壊滅的打撃を与えたが、海底に溜まった有機物を食べている底生有孔虫類は生き残れたと考えられる。さらに、衝突によって死滅したプランクトンなどの生物を分解するために大量の酸素を消費した結果、衝突後約7万年間の海洋は貧酸素環境になったことが硫黄の同位体比から示唆されている（Kajiwara and Kaiho, 1992）。このような環境も生物の生息環境に大きく影響を与えただろう。

花粉群集の絶滅率は約52%であり、花粉・胞子類の割合からは、K/Pg境界直後にシダ植物の胞子の割合が増加し、その後、裸子植物類の割合が増加していることが認められる（図4）。これも、海外のK/Pgセクションで見られる現象と類似している（McElwain and Punyasena, 2007）。

北アメリカやニュージーランドのK/Pg境界では、菌類の胞子化石における産出量のピークとイリジウムの異常値が認められる層準とが一致し、その直後、シダ類のピークが認められる（Vajda and McLoughlin, 2004；Tschudy *et al.,* 1984）。これは、衝突のエネルギーによって世界中で大規模な森林火災が起こり、植物相が一掃された後、まず菌類によって植物は分解され、その後、シダ類が最初に根を生やした結果であると考えられている。したがって、本地域でも大規模な森林火災が起こり、植物相が一度一掃されたことが示唆される。これは、粘土層の分析からも支持される（Mita and Shimoyama, 1999）。

このように、本地域のK/Pg境界層は、小天体が衝突したユカタン半島付近から約1万km離れた地域であるのにもかかわらず、直径10kmに及ぶ小天体の衝突が生物に多大な影響を与えた事を知る貴重な場所であると言える。

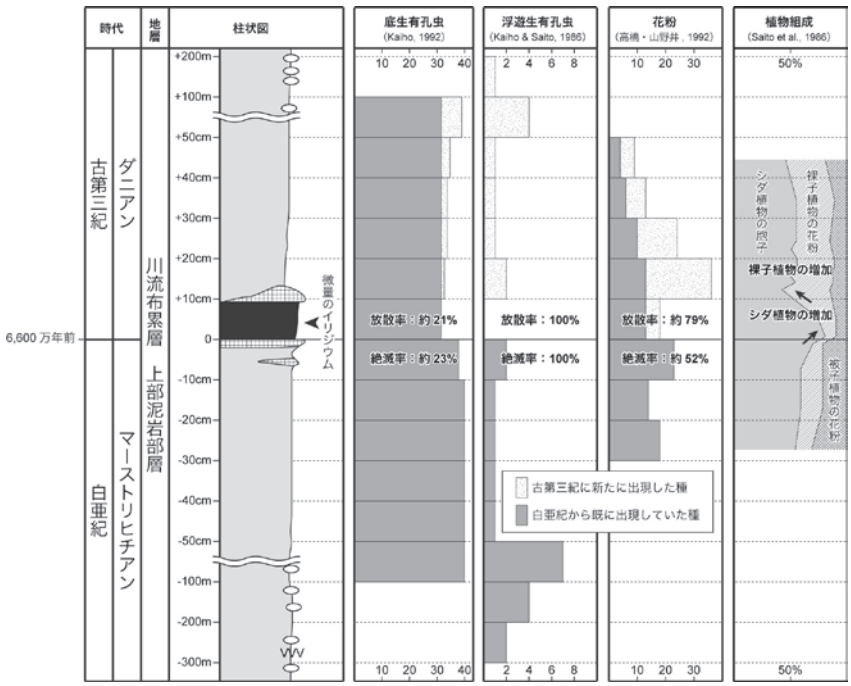


図4　川流布累層の白亜紀／古第三紀境界前後の柱状図と底生有孔虫（Kaiho, 1992），浮遊性有孔虫（Kaiho and Saito, 1986），花粉（高橋・山野井，1992）の種数変動及び植物の組成変動（Saito *et al*., 1986）.
種数は，化石の産出記録から生存期間を出し，K/Pg境界前後40cmは10cmごとにカウント，それ以外は100mごとにカウントした.

3．終わりに

2012年8月、浦幌町立博物館で開催されたモカワルップ川沿いにある白亜紀／古第三紀（K/Pg）境界を観察する講座で、K/Pg境界直下からアンモナイト化石が発見された（十勝毎日新聞2012年8月10日付）。現状、絶滅する直前の日本で最後のアンモナイトである可能性が高い。これは、日本などの太平洋地域において、絶滅直前にどのような種類のアンモナイトが生息していたのかを知る貴重な資料である。このように、今も本地域のK/Pg境界からは新しい発見がされており、今後の進展に期待したい。

４．謝　辞

本稿の投稿機会を与えてくださった、浦幌町立博物館館長の佐藤芳雄氏に感謝致します。

参考文献

Alvarez, L. W., Alvarez, W., Asaro, F. and Michel, H. V., 1980. Extraterrestrial cause for the Cretaceous-Tertiary extinction. *Science* 208：1095–1108.

Arinobu, T., Ishiwatari, R., Kaiho, K., Lamolda, A. M., 1999. Spike of pyrosynthetic polycyclic aromatic hydrocarbons associated with an abrupt decrease in δ^{13}C of a terrestrial biomarker at the Cretaceous-Tertiary boundary at Caravaca, Spain. *Geology* 27：723–726.

Benton, M. J., 1989. End-Triassic. *In* Briggs, D. E. G. and Crowther, P. R. (*eds*.), Paleobiology – Synthesis, 194–198, Blackwell Scientific Publications, Oxford.

Bohor, B., 1990. Shock-induced microdeformations in quartz and other mineralogical indications of an impact event at the Cretaceous-Tertiary boundary. Tectonophysics 171：359–372

Erwin, D. H., 1990. End-Permian. *In* Briggs, D. E. G. and Crowther, P. R. (*eds*.), Paleobiology – Synthesis, 187–194, Blackwell Scientific Publications, Oxford.

Hildebrand, A. R., Penfield, G. T., Kring, D. A. et al., 1991. Chicxulub Crater：A possible Cretaceous/Tertiary boundary impact crater on the Yucatán Peninsula, Mexico. *Geology* 19：867–871

平野弘道・海保邦夫、2004。4　地球史における生物事変。鎮西清隆・上村和彦編、古生物の科学5　地球環境と生命史、196–222、朝倉書店、東京。

Kaiho, K., 1992. A low extinction rate of intermediate-water benthic foraminifera at the Cretaceous/Tertiary boundary. *Marine Micropaleontology* 18：229–259.

Kaiho, K., Kajiwara, Y., Tazaki, K. *et al.,* 1999. Oceanic primary productivity and dissolved oxygen levels at the Cretaceous/Tertiary boundary：Their decrease, subsequent warming, and recovery. *Paleoceanography* 14：511-524

Kaiho, K. and Saito, T., 1986. Terminal Cretaceous Sedimentary Sequence recognized in the Northernmost Japan based on Planktonic Foraminiferal Evidence. *Proceedings of the Japan Academy* 62：145–148.

Kajiwara, Y, and Kaiho, K., 1992. Oceanic anoxia at the Cretaceous/Tertiary boundary supported by the sulfur isotopic record. *Palaeogeography, Palaeoclimatology, Palaeoecology* 99：151–162.

McElwain, J. C. and Punyasena, S. W., 2007. Mass Extinction events and the plant fossil record. *TRENDS in Ecology and Evolution* 22：548–557.

Mita, H. and Shimoyama, A., 1999. Distribution of polycyclic aromatic hydrocarbons in the K/T boundary sediments at Kawaruppu, Hokkaido, Japan. *Geochemical Journal* 33：305–315.

Montanari, A., Hay, R.L., Alvarez, W. *et al.,* 1983. Spheroids at the Cretaceous-Tertiary boundary are altered impact droplets of basaltic composition. *Geology* 11：668–671.

日本地質学会編、2010。日本地方地質誌1「北海道地方」。朝倉書店、東京、631ｐ。

Russell, D. A., 1974. Reptilian Diversity at the Cretaceous-Tertiary Transition in North America. *Geological Association of Canada, Special Paper* 13：119–136.

Saito, T., Yamanoi, T. and Kaiho, K., 1986. End-Cretaceous devastation of terrestrial flora in the

boreal Far East. *Nature* 323：253–255.

Schulte, P., Alegret, L., Arenillas, I. *et al.,* 2010. The Chicxulub Asteroid Impact and Mass Extinction at the Cretaceous-Paleogene Boundary. *Science* 327：1214–1218.

高橋清・山野井徹、1992。北海道東部川流布K/T境界試料の花粉学的検討。長崎大学教養部紀要自然科学篇32：187–220.

Tschudy, R. H., Pillmore, C. L., Orth, C. J. *et al.,* 1984. Disruption of the terrestrial plant ecosystem at the Creatceous-Tertiary boundary, Western Interior. *Science* 225：1030-1032

田崎和江・新谷美智・矢野倉実・海保邦夫・野田修司、1992。 K-T境界における粘土鉱物の特異性とイリジウム。粘土科学 32：86–96.

Toon, O. B., Zahnle, K., Morrison, D. et al., 1997. Environmental perturbations caused by the impacts of asteroids and comets. *Reviews of Geophysics* 35：41–78

Vajda, V. and McLoughlin, S., 2004. Fungal proliferation at the Cretaceous-Tertiary boundary. *Science* 303：1489.

吉田康登氏採集の植物標本

持田　誠[1)]・加納寛之[2)]

[1)] 帯広百年記念館（〒 080-0846　北海道帯広市緑ヶ丘2）
[2)] 日本福音ルーテル帯広教会（〒 080-0023　北海道帯広市西 13 条南 13 丁目 1 - 42）

MOCHIDA, Makoto & Hiroyuki KANO：Herbarium specimens of YOSHIDA Yasuto collecition.
Bulletin of the Historcal Museum of Urahoro 13：31-40, 2013.

Key words：Flora, museum collection, Urahoro, Ikeda Lutheran Church

1．緒言

浦幌町立博物館には、上浦幌小学校標本、中川公郎標本、吉田康登標本などの植物標本が収蔵されている。2012（平成24）年11月に、帯広百年記念館の移動展「博物館はなぜ標本を集めるのか？標本からわかること」展を開催し、これらの標本について展示・公開した。展示に際し、これらの植物標本について資料情報の調査･検討を実施した。本報ではこのうちの吉田康登標本について、採集者吉田康登氏の人物史と浦幌町、池田町との関わりを明らかにし、本標本の持つ意義について考察した。また、標本目録を作製し、今後の調査研究や教育への利用に供するものとした。

2．吉田康登氏

採集者の吉田康登氏は、池田町のキリスト教会牧師である（図1）。長崎県に生まれ、その後、ルター派（ルーテル教会）(註1) の牧師として神奈川県横浜や東京都で牧会に従事したとされる。しかし、第二次世界大戦中、政府による宗教統制で牧師の職を失うと共に三人の子息が応召 (註2)。終戦直後に東京都で募集していた集団帰農 (註3) に加わり渡道し、浦幌町に居住する。

図1　初代池田伝道所（後の池田教会）の前で。写真右端の男性が吉田康登牧師。1957（昭和32）年。
日本福音ルーテル池田教会所蔵。

『浦幌村五十年沿革史』には、吉田氏は当初、出身である九州への帰農を希望したが、既に希望者が多く、北海道へ赴く事になったと記録されている（浦幌村社会教育教會1949）。当時、北海道開拓協会が東京都と共に帰農者を募集していた事から、これに応じたものと思われる。

また、同書には、1945（昭和20）年9月7日の第一回入植者として「吉田康登　家族數：五、部落：萬年、前居住地：東京都、配當面積：7.1町、前職業：牧師」と記されているほか、当時、吉田氏が居住していた萬年の自宅の写真も掲載されている。しかし、吉田氏が浦幌町在住時に教会で牧師として勤務した事は無い。一方で、不慣れな農作業の傍らで家庭集会を開き、浦幌の人々に信仰の種を播いていたとされる。

一方、戦後になって池田町でルター派の教会設立の機運が高まった。1955（昭和30）年11月頃から、町内で聖書研究会を開いていた増田健二郎らにより、牧会の経験がある吉田氏が招聘され

たとされる（池田町史編纂委員会1979）。こうして1957（昭和32）年5月に初代の池田伝道所、後の池田教会が開設された（図2）。この初代池田伝道所は、地主から池田町旭町の土地を提供され、浦幌炭坑の協和会館建物を移築して設立されたものであった（図3）[註4]。伝道所開設と共に、吉田氏は浦幌町から池田町へ転出している。

1968（昭和43）年、都市計画による道路整備に伴い、教会は清見ヶ丘の麓の現在地へ移転。これに伴い、協和会館建物を活用した会堂を取り壊し、教会は新会堂（現会堂）を建築する事になる（図4-1、4-2）。吉田牧師は、教会建設の資金とするために自ら「押し花色紙」を製作して販売した（図5-1）。この取り組みは注目を集め、当時の新聞にも報道されている[註5]。

吉田牧師は、池田町在住時に地元の営林署からの依頼で、管内の植物調査と標本の製作を依頼されたと伝えられている。現在、浦幌町立博物館に残されている植物標本も、採集年代はこの時代のものである。

新会堂建設の資金捻出にあたり押し花色紙の製作・販売を思いついたのは、こうした標本製作の経験・蓄積があったためと思われる。初代教会時代の1961（昭和36）年8月に、教会が野外礼拝（教会主催のキャンプ）へ出かける際の写真が残されているが、ここには大型の胴乱[註6]を下げて歩く吉田牧師の姿が写されており、大変興味深い（図6）。

一方、営林署から依頼がある程、植物に関する知識や経験が知られていたという事は、以前から野生植物への関心が高かったものと推察されるが、それを裏付ける史料や、依頼を受けた営林署の標本がその後どうなったかについては未確認である。

図2　池田町旭町に建つ池田教会の初代会堂。1957（昭和32）年。池田教会所蔵。

図3　移築前の建物。浦幌炭坑の協和会館として用いられていた建物で、写真左奥にカマボコ屋根の会館が見える。会館とは廊下で接続していたらしい。1957（昭和32）年ころ。池田教会所蔵。

図4-1

図4-2

建設中の新会堂。町の区画整理で移転を余儀なくされたのを機に建設した。1968（昭和43）年5月ころ。図4-2は完成した新会堂の献堂式に集う人々と吉田牧師（玄関前の左側の人物）。1968（昭和43）年7月28日。共に池田教会所蔵。

図5-1

図5-2

二代目会堂を建設するにあたり、資金にあてる為に吉田牧師自ら製作・販売した野草の押し花色紙のうちのひとつ、ザゼンソウ（池田教会所蔵）。図5-2は吉田氏が製作したザゼンソウの標本（浦幌町立博物館所蔵）。製作の仕方が非常によく似ている事がわかる。

図6　野外礼拝へ向かう池田教会の人々。右から3人目の帽子をかぶる人物が吉田牧師で、肩から大型の胴乱を提げて歩く様子がわかる。1961（昭和36）年8月。池田教会所蔵。

３．標本の概要

（１）保存状況および採集年代

確認された植物標本は合計で107点であった。表１に標本目録を示す。浦幌町立博物館の登録台帳によると、同館の前身である浦幌町郷土博物館時代の1968（昭和43）年5月15日に、中川郡池田町在住の吉田康登氏（本人）より寄贈を受けていた。採集者による標本番号は付されておらず、浦幌町郷土博物館による受入番号が標本台紙背面に押印されており、これが事実上の標本番号となっている。なお、登録台帳上は108点だが、現在のところ1点が確認できておらず、同館に所蔵の他のコレクションに紛れている可能性が高い。今後の整理作業で発見されると思われる。

採集年代は、1961（昭和36）年9月22日から1969（昭和44）年5月15日までで、1962（昭和37）年採集の標本が27点と最も多く、1963（昭和38）年産が22点、1966（昭和41）年産が20点、1968（昭和43）年産が13点、1964－65（昭和39－40）年産が各12点、1961（昭和36）年産が1点であった。

標本はいずれも標本台紙に植物体と標本ラベルが貼付され、保護用のカバーがかけられた状態で収蔵されていた。保存状態は良好で、著しい破損や劣化は見られない。これは、標本自体が採集者により丁寧に製作されてきた事も大きいが、寄贈を受けて以来、コンテナに収蔵された状態で、展示や研究などによる活用もほとんど為されてこなかった事も、良好な保存状態を保ってきた背景と思われる。

（２）採集地域の特徴

採集地は池田町が58点と突出して多く、帯広市、豊頃町、浦幌町、本別町を含めた十勝圏で全体の66%にあたる71点を占めていた（図7）。池田町産標本58点のうち、32点が旭町、20点が清見で採集されており、これは初代池田伝道所の周辺で採集した可能性が高く、日常的に植物採集が行われていものと考えられる。

帯広市は「岩内仙境」、豊頃町は「大津海浜」「十弗」、浦幌町は「厚内海浜」、本別町は「夏川園」（義経山麓の本別公園の旧称）が採集地だった。池田伝道所では、本別町の義経山などへ野外礼拝に出かけていた事が、教会に残されている写真アルバムに記録されており（図6）、この際に採集しものが含まれていると推察される。

道内産標本には大雪山の標本が9点存在し、大半は「勇駒別」で採集されたものである。勇駒別は上川郡東川町であり、旭岳が含まれる事から、当該地域を登山中に採集したものと思われる。

表１　浦幌町立博物館所蔵「吉田康登採集植物標本」目録

収蔵番号	科名	学名	和名	採集年月日	採集地	備考
子嚢菌門チャシブゴケ菌綱チャシブゴケ目						
1968-1436	ウメノキゴケ科	Usnea diffracta Vain.	ヨコワサルオガセ	1964/7/22	大雪山勇駒別	
1968-1468		Nephromopsis nephromoides (Nyl.) Randlane & Saag	オオアワビゴケ	1964/7/22	大雪山勇駒別	
緑藻綱ハネモ目						
1968-1463	ハネモ科	Bryopsis plumosa (Hudson) C.Agardh	ハネモ	1966/3/22	神奈川県葉山海浜	
1968-1462	ホンダワラ科	Sargassum fulvellum C.Agardth	ホンダワラ	1966/3/22	神奈川県葉山海浜	
褐藻綱コンブ目						
1968-1518	コンブ科	Eisenia bicyclis (Kjellman) Setchell	アラメ	1966/3/22	神奈川県葉山海浜	
紅藻綱ウミゾウメン目						
1968-1461	ガラガラ科	Gloiophloea okamurai Setchell	ニセフサノリ	1966/3/22	神奈川県葉山海浜	
1968-1459	サンゴモ科	Amphiroa dilatata Lamouroux	カニノテ	1966/3/22	神奈川県葉山海浜	
1968-1516	テングサ科	Acanthopeltis japonica Okamura	ユイキリ(トリアシ)	1966/3/22	神奈川県葉山海浜	
1968-1460	オキツノリ科	Gymnogongrus flabelliformis Harvey	オキツノリ	1966/3/22	神奈川県葉山海浜	ラベルには「おきのり」と記載
シダ植物門						
1968-1499	マツバラン科	Lycopodium sitchense Rupr.	タカネヒカゲノカズラ	1964/7/22	大雪山勇駒別	
1968-1505	トクサ科	Equisetum palustre L.	イヌドクサ	1967/5/25	池田町清見	
1968-1527		Equisetum arvense L.	スギナ	1969/5/3	池田町	
1968-1508		Equisetum arvense L.	スギナ	1966/5/30	池田町利別	
1968-1465	ウラボシ科	Asplenium sarelii Hook.	コバノヒノキシダ	1963/1/23	肥前島原深江	現、長崎県南島原市深江
種子植物門裸子植物亜門						
1968-1541	イヌマキ科	Podocarpus chinensis Wall. ex Forbes	ラカンマキ	1964/5/10	肥前島原	現、長崎県島原市
種子植物門被子植物亜門双子葉綱古生花被亜綱（離弁花類）						
1968-1487	ヤナギ科	Salix bakko Kimura	ヤマネコヤナギ	1963/5/14	池田町旭町	
1968-1510		Salix integra Thunb.	イヌコリヤナギ	1963/10/12	池田町清見	
1968-1519		Salix integra Thunb.	イヌコリヤナギ	1963/10/12	池田町清見	
1968-1539		Salix integra Thunb.	イヌコリヤナギ	1965/6/25	池田町清見	
1968-1502	カバノキ科	Alnus viridis (Chaix) Lam. et DC. subsp. maximowiczii (Callier) D.Löve	ミヤマハンノキ	1984/8/14	定山渓	
1968-1441	クワ科	Morus bombycis Koidz.	ヤマグワ	1966/8/1	池田町旭町	
1968-1540	タデ科	Persicaria lapathifolia (L.) Gray	オオイヌタデ	1965/8/??	池田町清見	採集日は抹消した跡がある
1968-1484		Persicaria nepalensis (Meisn.) H.Gross	タニソバ	1962/9/15	池田町旭町	
1968-1467		Persicaria thunbergii (Siebold et Zucc.) H.Gross var. stolonifera (F.Schmidt) Nakai ex H.Hara	オオミゾソバ	1966/8/1	池田町旭町	
1968-1464		Rumex acetosella L. subsp. pyrenaicus (Pourret et Lapeyr.) Akeroyd	ヒメスイバ	1963/8/3	池田町旭町	
1968-1453	ナデシコ科	Melandrium firmum (Siebold et Zucc.) Rohrb.	フシグロ	1962/8/16	岩内	帯広市、岩内仙境
1968-1446		Stellaria radians L.	エゾオオヤマハコベ	1962/7/20	尺別	現、釧路市音別町尺別
1968-1512	キンポウゲ科	Actaea asiatica H.Hara	ルイヨウショウマ	1963/5/30	池田町清見	
1968-1443		Adonis amurensis Regel et Radde	フクジュソウ	1965/3/17	池田町清見	

収蔵番号	科名	学名	和名	採集年月日	採集地	備考
1968-1536		Adonis ramosa Franch.	フクジュソウ	1969/5/10	十弗	豊頃町十弗
1968-1476		Anemone flaccida F.Schmidt	ニリンソウ	1969/5/10	十弗	豊頃町十弗
1968-1511		Clematis apiifolia DC. var. biternata Makino	メボダンヅル・コボタンヅル	1963/1/23	肥前島原深江	現、長崎県南島原市深江
1968-1470	メギ科	Caulophyllum robustum Maxim.	ルイヨウボタン	1963/5/30	池田町清見	
1968-1442	ドクダミ科	Houttuynia cordata Thunb.	ドクダミ	1966/5/8	肥前島原	現、長崎県島原市
1968-1538	アブラナ科	Rorippa indica (L.) Hiern	イヌガラシ	1963/5/14	池田町利別	
1968-1493	マンサク科	Corylopsis pauciflora Siebold et Zucc.	ヒュウガミズキ	1964/1/20	花店	生花店で購入か？
1968-1522	ユキノシタ科	Hydrangea scandens (L.f.) Ser.	ガクウツギ	1965/6/16	天城山	静岡県、伊豆半島
1968-1530	バラ科	Agrimonia pilosa Ledeb. var. japonica (Miq.) Nakai	キンミズヒキ	1966/7/5	池田町清見	
1968-1498		Filipendula kamtschatica (Pall.) Maxim.	オニシモツケ	1964/7/22	大雪山勇駒別	
1968-1469		Potentilla sprengeliana Lehm.	キジムシロ	1963/8/3	池田町旭町	
1968-1483		Prunus japonica Thunb.	ニワウメ	1963/6/22	池田町旭町	
1968-1531	バラ	Sorbus sambucifolia (Cham. et Schltdl.) M.Roem.	タカネナナカマド	1964/7/22	大雪山	旭川営林署員 土肥氏採集.
1968-1477	マメ科	Desmodium racemosum DC.	ヌスビトハギ	1963/8/3	池田町旭町	
1968-1440		Lathyrus palustris L. / Lathyrus palustris L.	レンリソウ	1965/7/3	池田町清見	
1968-1438		Thermopsis lupinoides (L.) Link	センダイハギ	1968/7/20	厚内海岸	
1968-1454	フウロソウ科	Geranium wilfordii Maxim.	ミツバフウロ	1962/9/3	池田高校正門前	
1968-1506	カエデ科	Acer shirasawanum Koidz.	オオイタヤメイゲツ	1965/8/14	定山渓	
1968-1447	ツリフネソウ科	Impatiens textorii Miq.	ツリフネソウ・ムラサキツリフネ	1962/8/30	池田町旭町牧場	
1968-1479	ヒシ科	Trapa natans L. var. bispinosa Makino, excl. basion.	ヒシ	1963/6/22	池田町旭町●●園	●●は判読不能
1968-1445	アカバナ科	Epilobium cephalostigma Hausskn.	イワアカバナ	1962/7/27	本別夏川園	「夏川園」は本別公園の旧称
1968-1523		Epilobium hornemannii Rchb. var. foucaudianum (H.Lév.) H.Hara	ミヤマアカバナ	1965/7/29	池田町清見	
1968-1437	ミズキ科	Chamaepericlymenum canadense (L.) Asch. et Graebn.	ゴゼンタチバナ	1964/7/22	大雪山勇駒別	
1968-1481	ウコギ科	Panax schiuseng Nees. var. japonicum Makino	トチバニンジン	1966/8/4	温別	採集地は「音別」の誤記か？
1968-1455	セリ科	Conioselinum filicinum (H.Wolff) H.Hara	ミヤマセンキュウ	1962/8/16	岩内仙境	帯広市、岩内仙境
種子植物門被子植物亜門双子葉植物綱後生花被類（合弁花類）						
1968-1482	ツツジ科	Cassiope lycopodioides (Pall.) D.Don	イワヒゲ	1964/7/22	大雪山	旭川営林署員 土肥氏採集.
1968-1490		Elliottia paniculata (Siebold et Zucc.) Hook.f.	ホツツジ	1962/8/16	岩内仙境	帯広市、岩内仙境
1968-1501	ガンコウラン	Empetrum nigrum L. var. japonicum K. Koch	ガンコウラン	1965/8/5	大津海浜	
1968-1542	サクラソウ科	Lysimachia thyrsiflora L.	ヤナギトラノオ	1965/6/25	池田町清見	
1968-1475		Lysimachia vulgaris L. var. davurica (Ledeb.) R.Knuth	クサレダマ・イオウソウ	1962/8/11	池田町旭町	
1968-1497		Trientalis europaea L.	ツマトリソウ	1963/5/30	池田町清見	
1968-1515		Trientalis europaea L.	ツマトリソウ	1967/6/10	池田町清見	
1968-1480	リンドウ科	Gentiana zollingeri Fawc.	フデリンドウ	1969/5/15	池田町旭町	
1968-1489		Gentiana zollingeri Fawc.	フデリンドウ	1963/5/18	池田町旭町	
1968-1514		Gentiana zollingeri Fawc.	フデリンドウ	1967/5/2	池田町旭町	
1968-1500	アカネ科	Galium kamtschaticum Steller ex Roem.et Schult.var.acutifolium H.Hara	オオバノヨツバムグラ	1967/6/10	池田町清見	
1968-1491		Rubia jesoensis (Miq.) Miyabe et T.Miyake	アカネムグラ	1962/7/21	釧路貝塚町	
1968-1528	ムラサキ科	Omphalodes krameri Franch. et Sav.	ルリソウ	1966/9/23	北見	
1968-1486	レンプクソウ科	Adoxa moschatellina L.	レンプクソウ	1966/5/16	池田町旭町	
1968-1494	シソ科	Elsholtzia ciliata (Thunb.) Hyl.	ナギナタコウジュ	1962/9/15	池田町旭町	
1968-1448		Lycopus uniflorus Michx.	エゾシロネ	1962/8/25	池田町清見	
1968-1452		Mosla dianthera (Buch.-Ham. ex Roxb.) Maxim.	ヒメジソ	1962/9/8	池田町旭町牧場	

収蔵番号	科名	学名	和名	採集年月日	採集地	備考
1968-1525	オオバコ科	Plantago lanceolata L.	ヘラオオバコ	1963/8/1	野幌酪農学園	江別市
1968-1458	スイカズラ科	Lonicera japonica Thunb.	スイカズラ(ニンドウ)	1963/1/23	肥前島原深江	現、長崎県南島原市深江
1968-1503		Macrodiervilla middendorffiana (Carrière) Nakai	ウコンウツギ	1964/7/22	大雪山勇駒別	
1968-1439		Viburnum furcatum Blume ex Maxim.	ムシカリ(オオカメノキ)	1965/8/14	定山渓	
1968-1535	オミナエシ科	Patrinia gibbosa Maxim.	マルバキンレイカ	1965/8/14	定山渓	
1968-1450		Patrinia villosa (Thunb.) Juss.	オトコエシ	1962/8/16	岩内仙境	帯広市、岩内仙境
1968-1449	キク科	Artemisia sacrorum Ledeb.	イワヨモギ	1962/8/16	岩内仙境	元はホソバイワヨモギと同定
1968-1466		Chrysanthemum indicum L.	アブラギク	1963/1/23	肥前島原深江	現、長崎県南島原市深江
1968-1529		Chrysanthemum yezoense Maek.	コハマギク	1966/9/10	厚内海浜	
1968-1495		Contipeda setosum Kitamura	エゾノキツネアザミ	1962/9/15	池田町旭町	
1968-1521		Erigeron bonariensis L.	アレチノギク	1962/8/11	池田町旭町	
1968-1520		Eupatorium japonicum Thunb. var. simpleifolium Nakai	ヒヨドリバナ	1963/7/13	池田町旭町	
1968-1543		Matricaria matricarioides (Less.) Ced.Porter ex Britton	コシカギク	1966/7/10	池田町旭町	
1968-1526		Matricaria tetragonosperma (F.Schmidt) H.Hara et Kitam.	シカギク	1966/7/10	池田町旭町	
種子植物門被子植物亜門単子葉植物綱						
1968-1537	ヒルムシロ科	Potamogeton distinctus A.Bennet.	ヒルムシロ	1966/9/23	北見	
1968-1504	イグサ科	Luzula capitata (Miq.) Miq. ex Kom. var. lanigera Nakai	スズメノヤリ・ワタスゲ	1969/5/15	池田町旭町	
1968-1485	サトイモ科	Symplocarpus foetidus f. latissimus	ザゼンソウ(ダルマソウ)	1969/5/10	池田町	
1968-1534	カヤツリグサ科	Cyperus orthostachyus Franch. et Sav.	ウシクグ	1966/7/30	池田町旭町	元はチャガヤツリと同定
1968-1533	イネ科	Alopecurus aequalis Sobol.	スズメノテッポウ	1965/7/3	池田町旭町	
1968-1492		Coix lacryma-jobi L.	ジュズダマ	1962/11/2	東京鷺宮	現、東京都中野区鷺宮
1968-1478		Digitaria violascens Link	アキメヒシバ	1962/9/15	池田町旭町	
1968-1471	イネ科	Eragrostis multicaulis Steud.	ニワホコリ	1962/9/15	池田町旭町	
1968-1507		Isachne globosa (Thunb.) Kuntze	チゴザサ	1962/9/8	池田町旭町牧場	
1968-1451		Muhlenbergia japonica Steud.	ネズミガヤ	1962/9/3	池田町旭町牧場	
1968-1496		Muhlenbergia japonica Steud.	ネズミガヤ	1963/8/3	池田町旭町	
1968-1532		Poa annua L.	スズメノカタビラ	1962/9/15	池田町旭町	
1968-1474	ユリ科	Convallaria keiskei Miq.	スズラン	1962/5/30	池田町清見	
1968-1472		Paris verticillata M.Bieb.	クルマバツクバネソウ	1963/5/30	池田町清見	
1968-1444		Tricyrtis affinis Makino	ヤマヂノホトトギス	1962/10/31	天城山	静岡県、伊豆半島
1968-1473		Trillium camschatcense Ker Gawl.	オオバナエンレイソウ	1963/5/30	池田町清見	
1968-1517		Trillium camschatcense Ker Gawl.	オオバナノエンレイソウ	1969/5/10	十弗	豊頃町十弗
1968-1524	ラン科	Cephalanthera erecta (Thunb.) Blume	ギンラン	1965/6/28	池田町清見	元はクゲヌマランと同定
1968-1488		Liparis makinoana Schltr.	スズムシソウ	1961/9/22	池田町千代田 竹中氏林中	
1968-1456		Platanthera mandarinorum Rchb.f. subsp.ophrydioides (F.Schmidt) K.Inoue	キソチドリ	1962/8/16	岩内仙境	
1968-1513		Platanthera takedae Makino	ミヤマチドリ	1964/7/22	大雪山勇駒別	
1968-1509		Spiranthes sinensis (Pers.) Ames	モジズリ	1962/8/11	池田町旭町高台	

収蔵番号は浦幌町立博物館の資料登録台帳に記載の番号で、標本本体ではラベルではなく背面の管理表記に記載されている。
明らかな誤同定であると判断されるものについては、同定ラベルを付し、同定後の名称を記述した上で、備考欄に元の同定名を記載した。
シダ植物・種子植物の科の配列は『高等植物分類表』（伊藤1976）にもとづく新エングラー・システムによる。
科内の属および種の配列は、学名のアルファベット順による。
学名は、地衣類はHarada et al. (2004)、藻類は吉田・吉永（2010）、シダ植物と種子植物はYリスト（米倉・梶田 2003－）による。
採集者は特記の無い限り吉田康登氏。
採集地は標本ラベルに記述のまま。解釈を備考欄に記述した。

なお、コレクション全体のうち、大雪山採集標本の2点のみ、採集者が「旭川営林署員土肥氏採集」と記述されている。旭川営林署は現在の上川中部森林管理署で、同署は現在、大雪山を管轄している。しかし、標本採集時の1964（昭和39）年は、旭川営林署とは別に大雪営林署が存在して大雪山を管轄していた事から、公的な調査登山であった可能性は低いと思われる。

また、北見、釧路、音別[註7]と云った近隣市町村で採集された標本の他、札幌、江別で採集された標本がごく少数だが存在する。江別産標本は採集地が「野幌酪農学園」と記されているもので、現在の酪農学園大学、とわの森三愛高等学校である。酪農学園はプロテスタント系の学校法人であり、キリスト教関係の行事で赴いた際に、そこで採集したものと推察される。

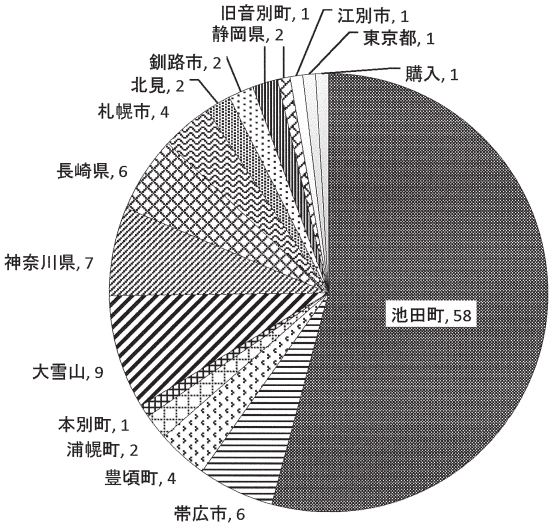


図7　吉田標本の採集地別標本点数

池田、帯広、豊頃、浦幌、本別の十勝5市町で三分の二を占める。

札幌産標本は定山渓で採集されている。また、道外の採集地のうち、「天城山」は静岡県伊豆半島の番三郎岳一帯を指す天城連山と思われる。この他「神奈川県葉山海浜」があり、三浦半島基部に位置する神奈川県三浦郡葉山町の海岸を指すと思われる。これら３地点の標本は採集年月日も集中している事から、旅行中に採集したものであろう。また、「東京鷺宮」と記された標本があり、現在の東京都中野区鷺宮を指すと思われるが、やはり旅行中の採集であろう。

一方、「肥前島原」「肥前島原深江」と記された標本が6点ある。これらは現在の長崎県島原市および南島原市深江（当時は南高来郡深江町）を指すと思われる。採集年が分散している事から、吉田牧師の出身地である長崎県へ赴いた際に採集したものと推察される。

（3）分類群の特徴

標本の内訳は、地衣類2点、藻類7点（うち緑藻2点、褐藻1点、紅藻4点）、維管束植物98点であった。維管束植物にはシダ植物、裸子植物を含んでいた。蘚苔類標本は無い。

地衣類はヨコワサルオガセ、オオアワビゴケの2点で、いずれもサルオガセ類（ウメノキゴケ科）だった。採集地は大雪山勇駒別である。ヨコワサルオガセは道東の沿岸部や高標高部に広く見られるサルオガセ類である。オオアワビゴケも道内の山地で広く見られ、十勝圏でもやはり大雪山系の然別湖一帯から生育が知られるが、本州では減少している地域があり、神奈川県では絶滅危惧種（神奈川県絶滅危惧Ⅰ類）に指定されている（高桑ほか2006）。

藻類はいずれも大型の海藻類で、神奈川県葉山海浜で採集されたものである。ハネモ、アラメは道内に分布がなく、オキツノリも道内では南部に生育し道東では稀である。アラメはアワビ類、サザエなどにとって重要な餌資源だが、近年、神奈川県の採集地周辺で行われた調査によると、アラメの分布する海水深幅が従来見られた水深幅よりも狭まっており、被度の減少も報告されている（秋元ほか2012）。

維管束植物では、裸子植物が肥前島原で採集されたラカンマキのみだった。また多くは草本類で、木本類は少なかった。最も多かったのはイネ科・キク科の8点で、大半は野生植物だが、オオイタ

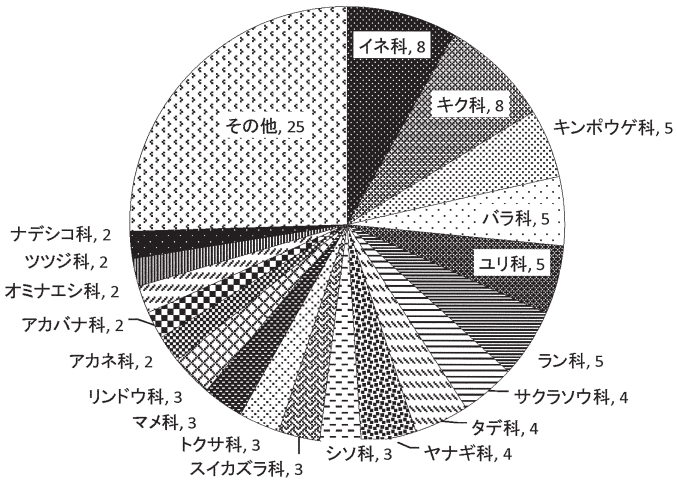


図8　吉田標本の分類別標本点数

吉田標本107点のうち、シダ植物と種子植物98点の科別標本点数。

ヤメイゲツ、ニワウメなどの栽培種も一部に見られた。また、ヒュウガミズキの採集地には「花店」と書かれており、生花店で購入したものを標本にしたと思われる。主な分類群の科別内訳を図8に示した。

全て同定されており、学名の表記にやや混乱が見られるものの、概ねそれらは正確で、植物の観察・同定に対する一定の素養がうかがえる。ただし、ラベルと植物体が一致していないものや、登録台帳と標本とが一致しないものが数点存在し、恐らく博物館受入時の整理作業で誤りが生じたものと思われる。現在、これらの整合作業を行っており、ラベルの張り替えや台帳との整合などを進めている。

帯広市の岩内仙境から採集されているキク科のホソバイワヨモギは、かつて道内ではカムイヨモギの別名で呼ばれ、広く認識されていた時代があった。現在はイワヨモギのシノニム（同物異名）とされ、区別しない事が多い。

池田町旭町から採集されているチャガヤツリは、同属のウシクグの誤同定である。チャガヤツリはもともと温帯系の種で道内では稀であるとされ、『十勝植物誌』（横山1950）にも記載が無いが、阿寒地方での採集例がある（滝田2001）。

同じく池田町清見で採集されているクゲヌマランも、標本では距が突き出して見える事からギンランの誤同定であると思われる。クゲヌマランは、道内では胆振地方以南の太平洋側に分布するとされる（滝田2001）。

北見で採集されているヒルムシロには、同定のポイントとなる果実や沈水葉が無い不完全標本で、オヒルムシロなど近縁種の可能性もあり、ヒルムシロ属ではあるが種を特定できなかった。

やはり北見で採集されているルリソウも、近縁他種である可能性があるが、情報が少なく断定できなかった。標本比較による詳細な検討が引き続き必要である。

全体として分類群には特定の傾向は見られず、希少種も少ない。特に維管束植物については、地域調査で採集した重複標本ではないかと思われる。吉田氏は地元の営林署の依頼で地域の植物相調査をしたと伝えられており、一般種が多い事と採集時期や場所から、その際の重複標本である可能性が高いと思われる。地衣類や藻類については、吉田氏の関心により特に採集されたものであろう。

4．標本の意義と今後の課題

吉田康登標本の大半は、池田町旭町、清見で採集されたもので、浦幌町で採集されたものは厚内海浜での2点のみである。しかし、もともと北海道に縁の無かった吉田氏が池田町で牧師をするに至った背景には、集団帰農者として浦幌町に居住した経緯があった事、また学芸員を配置した郷土博物館が池田にはなかった事から、標本は浦幌町に寄贈されたものと推察される。

植物学的には、標本中、特に十勝の普通種に関する1960年代の記録として、当コレクションの持つ意義は大きいと言える。当地域の植物相研究やレファレンスにおける活用が望まれると共に、当コレクションを土台として、池田・浦幌を中心とする地域植物相研究がいっそう進展する事が

期待される。

地方史的には、池田町に教会を新築する際に資金源とする為、自ら製作･販売した「押し花色紙」誕生のきっかけが当標本群であると言える。教会に残されている「ザゼンソウ」の色紙（図5-1）と、浦幌町立博物館所蔵の標本における「ザゼンソウ」（図5-2）を比較すると、製作方法の共通性がよくわかる。採集地の大半も教会の所在地であり、したがって、池田町の宗教史に関係する史料としての側面も持っていると言えるだろう。

植物研究史の観点からは、営林署から依頼を受けたとされる地域植物調査に関し、史実と残存標本の確認を急ぐ必要がある。また、植物研究者との間で同定依頼や標本交換などを行っていた可能性もあり、国内にはまだ残存標本がある可能性が高い。これらを今後の継続課題としたい。

註

1）日本福音ルーテル教会は、キリスト教プロテスタントの一教派であるルター派の日本における群れのひとつである。ルター派は、ドイツで起こったマルチン・ルターの宗教改革でカトリックから分裂したプロテスタントの源流を為す教派であり、信仰儀礼はカトリックの様式に近く、現代ではカトリックとプロテスタントの中間的な位置づけの教会である。同じルター派でも日本では北米系、北欧系、ドイツ系を由来とする諸団体があり、日本福音ルーテル教会は最大の群れである。1963年に旧日本福音ルーテル教会と東海福音ルーテル教会が合同して、現日本福音ルーテル教会が誕生した。池田町には明治年間より聖公会が多く、その他にも多くのキリスト教会が存在した記録があるが（『池田町郷土誌』によれば、1931年現在キリスト教会12と記されているが、教派の別などは不明）、現在では新興系を除くとカトリック池田教会、日本福音ルーテル帯広教会池田礼拝堂があるのみである。いずれも司祭館または牧師館に常駐の神父（カトリック）、牧師（ルーテル）はおらず、帯広教会からの巡回派遣となっている。

2）第二次世界大戦中、帝国政府はキリスト教に対する弾圧を行い、新教（プロテスタント）各教派を日本基督教団へ合同させる政策を強行した。日本福音ルーテル教会も日本基督教団第五部に編入されたが、信仰告白の不一致などから合同に反対した牧師は、牧師職を事実上追放された。戦後、日本基督教団が部制を解消して統一の信仰告白を制定するにあたり、ルター派、聖公会、日本基督教会、救世軍などいくつかの教派は離脱し、再び独立の教会を発足した。

3）集団帰農は、戦時中、空襲からの疎開と食糧増産体制の強化をはかるため、政府が企図した都市住民の集団移住政策である。背景には、深刻さを増す空襲による被害からの疎開と、徴兵により減少した農村人口、特に若年労働力の極端な不足があった。戦後は荒廃した都心部における大量の失業者への対策と、悪化の一途を辿る食糧事情への対応が主目的となった。もともとは戦時中の1945（昭和20）年3月に閣議設定された「都市疎開者ノ就農ニ関スル緊急措置要綱」に基づく措置で、京浜、名古屋、阪神の三地区の都市住民をそれぞれ北海道・東北・関東甲信越、東海・関東甲信越、近畿・中国の各方面へ振り分けた。

4）日本福音ルーテル池田教会には、初代伝道所の写真が残されている。伝道所に用いられたという協和会館は、浦幌炭坑で映画上映会など炭坑生活者の娯楽・集会所として用いられたカマボコ屋根の講堂が知られているが、移築前の写真を見ると、講堂に隣接して小家屋が接続している事がわかる（図3）。教会ではこの建物を伝道所として購入、移築した。

5）「珍しい押葉色紙づくり　池田の牧師さん」北海道新聞　1967年11月28日

6）採集した植物を入れて運ぶための金属製の缶。ビニル袋が普及する以前は、植物採集道具として最も一般的な道具だった。

7）標本ラベルには「温別」と記されているが、「音別」の誤記である可能性が高い。音別は採集当時の1966（昭和41）年は白糠郡音別町だったが、2005（平成17）年10月に釧路市と合併し、釧路市音別となった。

5．謝　辞

浦幌町立博物館の佐藤芳雄館長はじめ職員の皆様、博物館友の会の皆様方には、移動展の開催から標本調査、吉田康登氏調査に際して、さまざまな御協力を頂いた。日本福音ルーテル帯広教会および池田教会の皆様方には、吉田康登氏の関連資料の調査と資料の複製を許可いただき、聖誕節礼拝での展示をはじめ、ご配慮を頂いた。記して謝意を表する。なお、移動展「博物館はなぜ標本を集めるのか？標本からわかること」は、帯広百年記念館運営連絡協議会の主催による平成24年度事業として実施した。

6．引用文献

秋元清治・中西敏之・小山利郎・加藤健太 2012．相模湾におけるカジメ・アラメ場の実態について．神奈川県水産技術センター研究報告 5：1-9.

HARADA, Hiroshi, Tatsuya OKAMOTO & Isao YOSHIMURA 2004. A checklist of lichens and lichen-allies of Japan. Lichenology 2（2）：47-165.

池田町尋常高等小学校 1937．池田町郷土誌．池田尋常高等小学校，池田.

池田町史編纂委員会 1979．第６編池田町の社会：宗教・文化・体育・観光・医療と社会福祉．池田町，池田.

伊藤洋 1976．新高等植物分類表．北隆館，東京.

高桑正敏・勝山輝男・木場英久2006．神奈川県レッドデータ生物調査報告書2006．神奈川県立生命の星・地球博物館，小田原.

滝田謙譲 2001．北海道植物図譜．自費出版.

浦幌村社会教育教會 1949．浦幌村五十年沿革史．浦幌村，浦幌.

横山春男 1950．十勝植物誌．帯広営林局，帯広.

米倉浩司・梶田忠 2003．BGPlant和名－学名インデックス（YList），http://bean.bio.chiba-u.jp/bgplants/ylist_main.html（2013年2月26日）

吉田忠生・吉永一男 2010．日本産海藻目録．藻類．58：69-122.

票結完（欄外）

大正六年十月九日發議
大正六年十月九日判決
大正六年十月九日扱濟　浄書　㊞　校合　㊞
村長　㊞　首席　係　㊞　主任
番號　浦第　六八四　號　件名　未開地賣拂願

十勝國十勝郡浦幌村大字浦幌村字浦幌村

一　原野　百参拾八町歩
　但本地内ノ樹木
　外賣拂地別紙調査ノ通リ

右北海道國有地未開地處分法第二条及施行規則第七条ニ依リ相當代價ヲ以テ土地及立木共ニ賣拂相成度圖面、起業方法書、事業経營許可書謄本並ニ村會議決書謄本相添此段相願候也

大正六年十月九日
北海道十勝郡浦幌村
代表者十勝郡浦幌村長　井上　吉衛

北海道廳長官　俵　孫一　殿

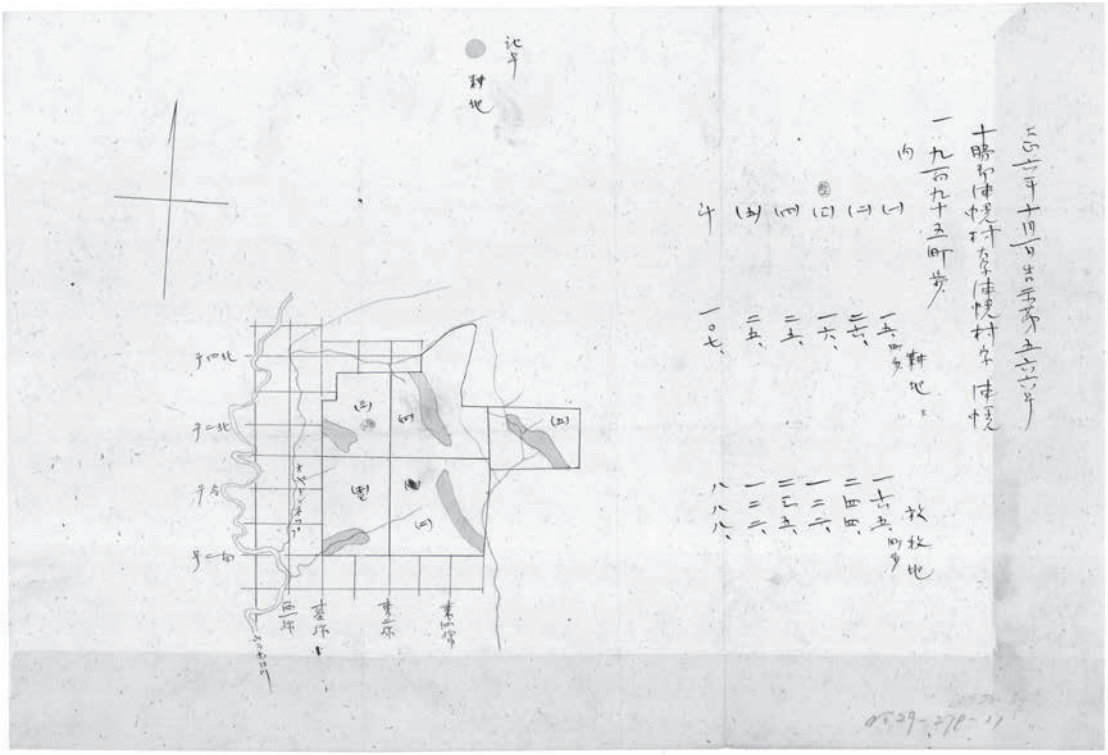
「別（朱筆）紙」

起業方法書

一、開墾ノ方法　小作開墾
二、事業配当程度
　百弐拾弐町歩　牧草地
　拾六町歩　耕地
　耕地ハ初年度ヨリ向フ八ヶ年間毎年貳町歩ツヽ開墾

右之通リニ候也
大正六年十月日
十勝郡浦幌村長　井上　吉衛

注　完結票は無記載のため省略す



相成居候」就テハ多数共願者可有之候「トハ存知」(加筆)
□□□何卒特別之御詮議ヲ以テ本村ニ御拂下相成候様御取計相
成致度此段特ニ副申候也
大正六年十月九日　　村長名
河西支庁廳長　殿
注　完結票に記載無く省略す

割印(欄外)

庶第　六八四　号　　㊞

未開地賣払願ニ關スル副願書

十勝郡浦幌村大字浦幌村字御浦幌
一　未開地百三十八町歩　　放牧地及畑目的地
但シ大正六年十月一日告示第五六六号反別九百九十五町歩ノ
内第三号
右本日別紙ノ通リ賣払願書提出致候處由来本村ノ地タル最農場ニ
適シ畜産奨励ノ結果近年「稍々」(削除)「漸次」(加筆)良馬ヲ産出スルニ至リ
「其ノ」(加筆)数亦逐年増加ノ傾向ニシテ」目下三千余頭ノ馬匹ヲ算スル
「ニ至レタル」(削除)ノ域ニ進ミ「猶」(加筆)将来益々之カ發達ヲ見ントスル
ノ趨勢ニ有之候然ニ逐年拓「地」(加筆)殖民ノ歩ヲ進ルニ隨ヒ暫時放牧地
ノ縮小トナリ「今ニシテ」(削除)之カ存置ヲ計サレハ」将来畜産者ノ困難
ヲ「見ル」(削除)事ナル□□」感スルニ□ルヘキハ無論ナレハ「今ニシテ」(加筆)
之ヲ「共同」(加筆)放牧地トシテ存置スルノ必要アリ殊ニ該地ハ本村ノ
樞要地タル浦幌市街地ニ接續セルモノニシテ先年下総要蔵ナル者
ニ於テ受貸中ハ「此地内ニ」(加筆)十勝種馬牧場種付出張所及家畜市場
ヲ設置シ地方ノ發展上大ニ便益ヲ「図」(削除)「與ヘ」(加筆)タルモ貸付取消
御処分後ハ該地ヲ使用スルコトハ能ハス亦他ニ適當ノ場所無「キ」(削除)
ヲ」ク大ニ不便ヲ感シ「タル」(削除)一日モ捨置難キ事情ニ差迫リタル
「ヲ以テ」(削除)「ニ依リ」(加筆)大正三年二月十一日ヲ以テ賣拂願書提出シ
タルニ右ハ未告示地ナリトテ願書却下相成「止ムヲ得ス」(削除)爾來右
ノ事業「業ハ全然」(加筆)中止スルノ已ヲ得サルニ立至リ實ニ本村ニ於
ル産馬改良事業「□□」(削除)ニ「大ナル」(加筆)蹉跌ヲ来タシタルハ勿論
「□□」(削除)村民ノ経営上多大ノ不利益トナリ延イテ地方ノ開發「上」(削除)
甚大ノ影響ヲ及ホ」ヲ沮害シタルコト亦尠シトセス且又浦幌市街
地ニハ井ヲ鑿ツモ何レモ水質悪クシテ飲料ニ適セサルヲ以テ同市
街地住民ノ全部ハ本地内ヨリ湧出セル清泉ヲ汲ミテ飲料水ト為シ
以テ今日ニ至レル事実ニシテ之カ水源涵養ノ必要モ有之候
以上縷述ノ事実ナルヲ以テ本村ニ於テ之ヲ「永遠ニ」(加筆)保存シ公共
ノ利益ヲスルト同時ニ基本財産増殖ノ目的ヲ達成致度存候条事情
御諒察ノ上「何卒」(加筆)特別ノ後詮議ヲ以テ本村ニ御拂下ノ御處分被
下候様致度此段特ニ奉願候也
尚願書添付ノ議決書及支廳長ノ許可書ハ大正三年末告示中ヲ以
テ調製シタルモノニシテ自然今回告示相成候分ト多少ノ相違ハ
有之候得共其意旨ニ於テハ何等ノ異変無之モノニ付更ニ是等ノ
手續ヲ為サス當初ノモノニシテ其侭添付致置次第ニ御座候候条
是亦特別ノ御取扱被成下候様致度奉願候
大正六年十月九日　　村長名
北海道廳長官　殿

庶第　六八四　號　　㊞

未開地賣拂願ニ関スル副願書

十勝郡浦幌村大字浦幌村字浦幌

一、未開地百参拾八町歩　　放牧地及畑目的

但シ大正六年十月一日告示第五六六號反別九百九拾五町歩ノ内第三號

右本日別紙ノ通リ賣拂願提出致候處由ライ本村ノ地タル最農牧ニ適シ畜産奨勵ノ結果近年漸次良馬ヲ産出シルニ至リ其ノ數亦逐年増加ノ傾向ニシテ目下三千餘頭ノ馬匹ヲ算スルノ域ニ進ミ猶将来益々之カ發達ヲ見ントスルノ趨勢ニ有之候然ルニ逐年拓地殖民ノ歩ムルニ随ヒ漸次放牧地ノ縮少トナリ将来畜産者ノ困難ヲ感スルニ至ルヘキハ勿論ナレハ今ニシテ之ヲ共同放牧地トシテ存置スルノ必要アリ殊ニ該地ハ本村ノ樞要地タル浦幌市街地ニ接續セルモノニシテ先年下總要蔵ナル者ニ於テ受貸付中ハ此地内ニ十勝種馬牧場種付出張所及家畜市場ヲ設置シ地方ノ發展上大ニ便益ヲ與ヘタルモ貸付取消後処分後ハ該地ヲ使用スルコト能ハス亦他ニ適當ノ場所無ク大ニ不便ヲ感シ一日モ捨置難キ事情ニ差迫リタルニ依リ大正三年二月十一日ヲ以テ賣拂願書提出シタルニ右ハ未告示地ナリトテ願書却下相成爾來右ノ事業ハ全然中止スルノ已ム得サルニ立至實ニ本村ニ於ケル産馬改良事業ニ大ナル蹉跌ヲ来タシタルハ勿論村民ノ經在緒上多大ノ不利益トナリ延イテ地方ノ開發ヲ沮害シタルコト亦尠シトセス且又浦幌市街地ニハ井ヲ鑿ツモ何レモ水質悪シクシテ飲料ニ適セサルヲ以テ同市街住民ノ全部ハ本地内ヨリ湧出セル清泉ヲ汲ミテ飲料水ト為

割印（欄外両頁に渡る）

シ以テ今日ニ至レル事實ニシテ之カ水源涵養ノ必要モ有之候

以上縷述ノ事實ナルヲ以テ本村ニ於テ之ヲ永遠ニ保存シ公共ノ利益ヲ保全スルコト同時ニ基本財産増殖ノ目的ヲ達成度致存候条事情御諒察ノ上何卒特別ノ御詮議ヲ以テ本村ニ御佛下ノ御処分被成下候様致此段特ニ奉願候也

尚原書添付ノ議決書及支廳長ノ許可書ハ大正三年末告示中ニ於テ調製シタルモノニシテ自然今回告示相成候分ト多少ノ相違ハ有之候得共其ノ意旨ニ於テハ何等ノ異変無之モノニ付更ニ是等ノ手續ヲ為サス當初ノモノヲ其侭添付致置候次第ニ御座候条是亦特別ノ御取扱被成下候様致度奉願候

大正六年拾月九日

十勝郡浦幌村長　井上　吉衛

北海道廳長官　俵　孫一　殿

北海道十勝郡浦幌村長印

大正六年十月九日發議

大正六年十月九日判決

大正六年十月九日扱濟　㊞　浄書　㊞　校合　㊞

村長　㊞　首席　係　㊞　主任

番號［浦］（削除）「庶」（加筆）第六八四號　件名　未開地賣払願ニ關スル副申

十勝國十勝郡浦幌村大字浦幌村字浦幌

一　未開地百三十八町歩　　放牧地及畑目的

但大正六年十月一日告示第五六六号反別九百九十五町歩ノ内第三号

右ノ土地村有財産トシテ賣拂候處別紙ノ通リ願書提出候處右ハ別紙副願書ニ陳述候事情ニシテ之カ願急徹底方ニ付テハ□□御配慮相仰キツ、有之候□ニシテ［本村］（削除）ニ於テ賣拂ノ御處分相受ケサル」「其ノ」（加筆）事情ニ付イテハ［十分］（削除）御處分ノ□□□□」今更申上ル迄モ無ク候「疾リニ」（加筆）十分御承知□□候［□□□□□］（削除）「事ト

完（欄外）

票結

十勝郡浦幌村長　井上　吉衛」

北海道十勝郡浦幌村長印

村會議決書

十勝國十勝郡浦幌村大字浦幌村字下浦幌基線北壹番　參番　五番
七番　九番　拾壹番地　東壹線北壹番乃至拾貳番　東貳線北貳番
四番　六番　八番　拾番　拾貳番地
未開地百貳拾町歩

二、出願地ノ樹木
本地ハ既ニ所用立木伐採後ナルヲ以テ全地内疎林ニ帰シ目通経七寸以下ノ雑木員数約貳百五拾本價格ハ薪炭材トシテハ収支償ヒ難シト認メラル

三、事業方法
（イ）本地ハ民有馬匹ノ共同牧場トシテ経営スルモノトス
（ロ）本地ノ周囲ノ延長貳千四百間ニ木柵廻ラスモノトス
（一）木柵ハ一間毎ニ杭ヲ建テ丸太経五寸以上ノモノ二ッ割トシ長八尺以上ニシテ根入三尺以上トシ二段ニ横ヲ通シ高平均五尺トス
（二）飲用水ハ細流ナルヲ以テ特種ノ設備ヲ要ス
（三）牧舎及飼畜ニ関スル設備ハ放牧地附近ニ於テ各人ニ施設シアルヲ以テ之設ス
（ハ）樹木ハ飼畜ノ陰影ヲ作ル為メ木柵用木ヲ伐採スルノ外放牧ニ支障ナキ限リ伐採セサルモノトス
（ニ）放牧場ニハ牝馬ヲ放牧シ飼料ハ特種ノ穀類ヲ各自ニ於テ與フル以外ニハ全地ニ生茂スル野草ヲ以テ之レニ充ツ

四、事業配當程度
初年木柵貳千四百間ヲ完成スルモノトス（全延長トス）

（欄外）割印

五、事業費
金參百六拾円也
但木柵代貳千四百間造成費壹間五拾錢初年度ニ於テ本村特別會計ヨリ支出スルモノトス

六、収支計算書
初年ハ事業中ニ属スル以テ放牧料金ヲ徴収セス
二年目ヨリ馬匹放牧料一頭一ヶ月金五拾錢ヲ徴収シ一ヶ年二百頭放牧セシメ此料金毎年百圓ノ収入ヲ得ヘキ予定ニシテ毎年其五歩以上ヲ基本財産トシテ蓄積スルモノトス

七、放牧料
明二歳以上ノ牝馬一頭金五拾錢
明二歳ハ一頭金貳拾五線
當歳ハ無料トス
放牧料金ハ放牧ノ際徴収スルモノトス

八、圖面別紙ノ通リ

九、財源調書
土地賣拂代金ハ本村基本財産蓄積金五千貳百拾壱円貳拾五錢八厘ノ中ヨリ支出スルモノトス

右本村基本財産ノ造成ノ目的ヲ以テ共同牧場トシテ賣拂出願スルモノトス

大正貳年九月貳拾貳日

十勝郡浦幌村長　東郷　重光

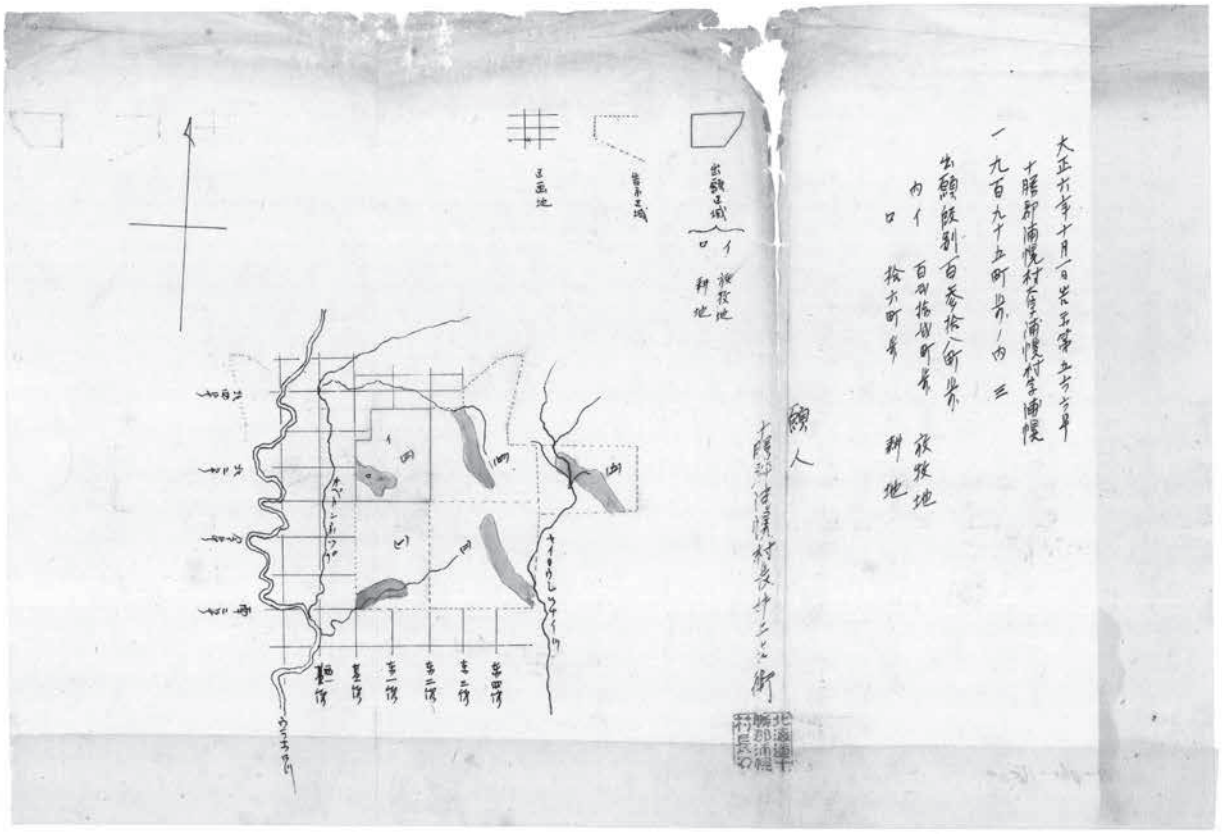
「右原本（全文朱筆）ニ依リ謄写ス

大正六年十月九日

十勝郡浦幌村長　井上　吉衛」

北海道十勝郡浦幌村長印

（欄外）割印
（欄外）割印



賣拂地調査

一、未開地　九拾七町九段七畝歩
但大正貳年四月貳拾貳日北海道十勝郡浦幌村大字浦幌村字ルシンニ於テ畑目的ヲ以テ賣拂ヲ受ク
一、未開地　拾貳町九段壹畝九歩
職印（欄外）「壱字削ル」（欄外）　但大正貳年四月貳拾参日北海道十勝郡浦幌村大字浦幌村字［村］（削除）ニ於テ畑目的ヲ以テ賣拂ヲ受ク
一、未開地　参町壹段七畝五歩
但大正貳年四月貳拾壹日北海道十勝郡浦幌村大字浦幌村字上浦幌ニ於テ畑目的ヲ以テ賣拂ヲ受ク
右之通リ候也
大正六年十月九日
十勝郡浦幌村長　井上　吉衛
北海道十勝郡浦幌村長印

地　第　九七〇　號
十勝郡浦幌村役場
大正貳年九月貳拾六日浦第六参四八號申請大字浦幌村字下浦幌基線北壹番参番　五番　七番　九番　拾壱番地　東壹線北壹番乃至拾貳番　東貳線北貳番　四番　六番　八番　拾番　拾貳番地ニ於テ未開地百貳拾町歩ヲ基本財産造成目的ノ為メ共同牧場並ニ事業経営ニ関シ賣拂出願ノ件許可ス價
大正参年貳月四日
北海道廳河西支廳長
北海道廳支廳長　松井　與一郎
「右原本（全文朱筆）ニ依リ謄写ス
大正六年十月九日

但　開墾費用ハ初年ヨリ三年マテ間ニ開墾シタル畑面積ヲ鍬下トス其ノ初年ヨリ四年間徴収セサル小作料ヲ以テ之ニ充ツルモノトス

右ノ通ニ候也

明治四十三年七月二日

北海道十勝郡生剛村長　石原　重方

代表者　十勝郡浦幌村長　井上　吉衛

北海道廳長官　俵　孫一　殿

付箋文

拓勝第「二〇九一」號

本願詮議致シ難ク候條別紙付候也

大正七年五月八日

北海道廳

北海道廳

「第」（朱筆）六八四「號」（朱筆）

未開地賣拂願

十勝國十勝郡浦幌村大字浦幌村字浦幌

大正六年十月一日告示第五百六十六號反別九百九十五町歩ニ内

第三號

一、原野百參拾八町歩　放牧地及畑地目的

但シ本地内ノ樹木

外　賣拂地別紙調査ノ通リ

右北海道國有未開地處分法第弐条及施行細則第七条ニ依リ相當代價ヲ以テ土地及立木共ニ賣拂相成度圖面、起業方法書、事業経営許可書謄本平ニ村會議決書相添此段願候也

大正六年十月九日

北海道十勝郡浦幌村

北海道十勝郡浦幌村長印

付箋（欄外）

有

起業方法書

一　開墾ノ方法

小作開墾

二　事業ノ配当

百貳拾貳町歩　放牧地

拾六町歩　「畑」（削除）耕地

職印（割印）「壱字削ル」

耕地ハ初年ヨリ向フ八ヶ年間毎年貳町歩ツ、開墾

右ノ通リニ候也

大正六年十月九日

十勝郡浦幌村長　井上　吉衛

北海道十勝郡浦幌村長印

七　成墾坪数及存置地坪数全地積ヲ畑地ニ開墾スルモノトス
　　存置地ナシ
八　小作契約書雛形、生剛村土地建物賃貸規則ニヨル
九　圖面ノ通リ
　　但シ未開地賣願ニ添付ノモノト同シキヲ以テ之ヲ畧ス

村会決議書

生剛村明治四十三年度基本財産特別会計歳入出豫算表中抜書

歳　出

経常部

金額	本年度豫算額	附記
第一款財産蓄積金	九〇七	三六二
第二項地所購入費	七〇	〇〇〇
一目地所購入費科目	七〇	〇〇〇
		未開地二十八丁歩買入一町歩金二円五十銭

明治四十三年二月二十七日議決

右謄本ハ原本ニ依リ必要ノモノヲ抜写シタルモノナリ

明治四十三年七月二日

起業収支計算書

収入ノ部

金額	収入科目	事由	附記
二二	基本財産特別会計	小作料	小作料ハ初年ヨリ四年間徴収セス五年目ヨリ一反歩金一円五十銭ノ割ヲ以テ徴収シ基本財産特別会計蓄積金トシテ蓄積スルモノトス
一七八	財産ヨリ生スル収入小作料		

支出ノ部

金額	支出科目	事由	附記
二二	基本財産特別会計財産蓄積金地所買入金	地積賣拂代	全地積八丁八反七畝四歩一丁歩二円五十銭ト見積リ四十三年度ニ於テ支出スルモノトス賣拂ヲ受ケタル四年目ヨリ
一七八			
六	一般会計諸税及負担	地方税	支出スルモノトス　四年目開墾地積六丁六反歩ニ對シ二円七十七銭二リ　五年目以上八丁八反七畝四歩ニ對シ三円七十二銭六厘但シ一反歩金四銭二リノ見込
四九八	諸税地方税	反別税	

調　査

一　十勝郡生剛村大字生剛村下浦幌基線北八十四番甲八十四番乙
　未開地八町八段七畝四歩畑地ノ目的

二　本地ハ草原地ニシテ樹木ナシ

三　開墾ノ方法
　鍬下ノ年期ヲ付シ初年ニ於テ小作人ニ戸ヲ収容ス　小作人ハ当村内ノ希望者中ヨリ選定スルモノトス　一戸ニ關スル開墾地積ハ四町三反七畝十八歩ト四丁四反九畝十六歩トス

四　事業配当程度
　初年　二十二反歩開墾
　　小作人二戸収容
　二年　二十二反歩開墾
　　小作人二戸収容
　三年　二十二反歩開墾
　　小作人二戸収容
　四年　二十二反七畝四歩開墾
　　小作人二戸収容

五　小作人ニ開墾費用全部ヲ負担セシムルニヨリ本村ハ未開地賣払代金及公課ヲ負担スルノ他支出スル費用ナシ

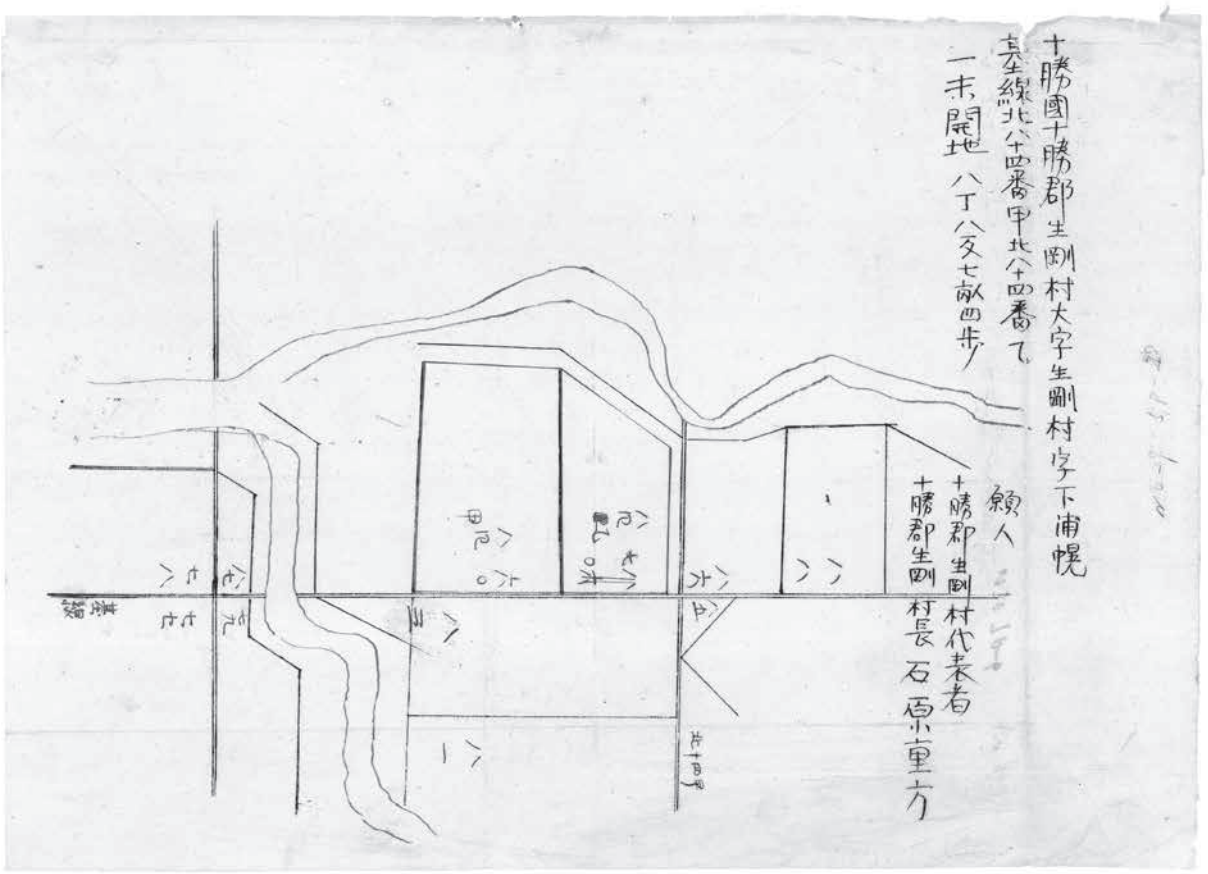
六　収支計算書

支出ノ部

金額	支出科目	事由	附記
二二一	基本財産特別会計財産蓄積金地所買入費	地積賣拂代	全地積ハ八丁八反七畝「四」（加筆）歩一丁二円五十銭ト見積り四十二年度ニ於テ支出スル
一七八			
六	一般会計諸税及負担諸地方税	地方税反別割	記賣拂ヲ受ケタル四年目ヨリ支出スルモノトス（一反歩四銭ヨリ）四年目開墾地積六丁六反歩ニ對シ（二円七十七銭二リ）五年目仝上八丁八反七畝四歩三円七十二銭六リ
四九八			

収入ノ部

金額	収入科目	事由	附記
一三三	基本財産特別会計財産ヨリ生スル収入小作料	小作料	小作料ハ初年ヨリ四年間徴収セス五年目ヨリ一反歩金一円五〇銭ノ割ヲ以テ徴収シ基本財産特別会計蓄積金トシテ蓄積スル
〇七〇			



地第　三六五　号

十勝郡生剛村役場

明治四十二年四月五日第一三六八号稟帖未開地賣拂出願ノ件

右北海道二級町村制第六十条ニ依リ許可ス

明治四十二年十月三十日

北海道廳河西支廳長

北海道廳支廳長　東郷　重方

右謄本ナリ

明治四十二年十一月二十二日

十勝郡生剛村村長　東郷　重方

生剛村会議決書

未開地賣拂出願ノ件

本村基本財産造成ノタメ左記未開地ノ賣拂ヲ出願セントス

一　十勝郡生剛村大字浦幌村字下浦幌基線北八十四番　甲八十四番乙

未開地八町八段七畝四歩

但　畑地ノ目的

明治四十二年三月三十一日議決

右謄本ナリ

十勝郡生剛村長　石原　重方

十勝郡生剛村長　石原　重方

河西支廳長　松井　与一郎　殿

勝第　八〇五　號

明治四十三年六月二十八日

河西支廳

生剛村役場

未開地賣拂願ノ件

貴村未開地賣拂願書中訂正ノ箇所捺印ヲ要候條相當捺印至急回送相成度別紙ノ添付此段及照會候也

追テ村会決議書中抜起業ノ収支計算書添付相成度申添候也

第　九、三三八　号

未開地賣拂願

十勝國十勝郡生剛村大字生剛村字下浦幌基線北八四番甲

一　未開地四町三反七畝十八歩　畑地ノ目的

但シ本地内樹木ナシ

仝　北八十四番乙

一　未開地四町四反九畝十六歩　畑地ノ目的

但シ本地内樹木ナシ

計　八町八反七畝四歩

外

土地ノ賣払ヲ受ケタルモノ又ハ出願中ノモノナシ

右北海道國有未開地處分法第二条及試行規則第七条ニ依リ相当代價ヲ以テ賣払相成度起業方法書圖面出願許可指令書謄本相添此段相願候也

明治四十二年十一月二十二日

十勝郡成剛村代表

十勝郡生剛村長　石原　重方

北海道廳長官　河嶋　醇　殿

起業方法書

一　開墾ノ方法小作人二戸収容

二　事業ノ配当

初年　二十二反歩開墾　小作人二戸収容

二年　二十二反歩開墾　小作人二戸収容

三年　二十二反歩開墾　小作人二戸収容

四年　二十二反歩開墾　小作人二戸収容

三　存置地ナシ

右ノ通ニ候也

明治四十二年十一月二十二日

十勝郡生剛村代表

十勝郡生剛村長　石原　重方

（紫スタンプ）「拓第」「四三八」（加筆）（紫スタンプ）「号」

大正四年四月二六日

浦幌村長　殿

河西支廳

北海道
廳河西
支廳長

（枠・文字共に朱）

完結

（欄外）割印

（欄外・加筆）「大正四年

五月一日　浦幌市街境界実測ニ関スル件

実測ノ　本月二十三日浦第一、二五五号ヲ以テ本件ニ関シ申請相成

為メ河　候處不日吏員派

西支廳　遣実測可為致候條模擬ニ了知相成候也

阿部技

師来村ス

土地関係

二」

拓勝　第「一一二」（加筆）號

北海度十勝郡

浦幌村

（欄外）割印

「明治四拾参」（加筆）年「七」（加筆）月「七」（加筆）日北海道廳河西支廳指令第

「七七八」（加筆）號ヲ以テ十勝國「十勝」（加筆）郡「浦幌」（加筆）村「大字浦幌」（加筆）村字

下浦幌基線八拾四番地甲ノ一仝番地甲二八十四番地乙ノ一仝番地

乙ノ二――」ニ於テ北海道國有未開地處分法第二條ニ依リ「畑」（加筆）

目的ニテ賣拂ヒタル原野「八町」（加筆）八反七畝四」歩ニ對シ大正「四」（加筆）

年「八」（加筆）月「参拾」（加筆）日檢査ヲ遂ケ全成功シタルコトヲ證ス

大正「四」（加筆）年「拾弐」（加筆）月「二十八」（加筆）日

北海道廳河西支廳長

北海道廳支廳長　横瀬　農夫也

北海道
廳河西
支廳
長之印

指令第　六二〇　號

十勝郡浦幌村

明治四十三年七月七日北海道廳河西支廳指令第七七八號畑目的ヲ

以テ賣拂タル十勝國十勝郡浦幌村字下浦幌原野八町八反七畝四歩

ノ立木代金六拾三銭ハ算定誤リタルモノニ付キ左ノ通更正ス

明治四十五年五月二十二日

北海道廳加西支廳長

北海道廳支廳長　「横瀬」（削除）　農夫也」

「松井」（加筆）　與一郎」

記

一、立木代金　金六十銭

第　九、三三八　号

未開地賣拂願ニ関スル件

客年十一月二十二日付第九三三八號ヲ以テ出願ニ係ル生剛村字下

浦幌基線北八十四番「ノ」（加筆）甲乙ノ未開地二万六千三十坪ノ土地ハ

是非本年ニ於テ小作契約致度ニ付至急御指令成仰度此段申請候也

明治四十三年五月二日

境界調書

十勝郡浦幌村大字浦幌村字下浦幌西二線廿八番地

森　三樹二

右之者所有地十勝郡浦幌村大字浦幌村字下浦幌西二線北四番地仝線北六番地境界調査ノ為メ大正四年六月七日八日代人君貞次及隣地浦幌村長東郷重光ヲ現場ニ立會セシメ調査ヲ遂ケタルニ左ノ如シ

一　測量ノ結果各所有地実測図ノ通リ相違無之コトヲ承認ス

依テ別紙実測圖ノ如ク境界ヲ定メ此調書ヲ作リ各立會人ニ讀聞カセタルニ何レモ承諾シ相違ナキ旨申定タルニ付共々署名捺印スルモノナリ

大正四年六月［十］（削除）八日

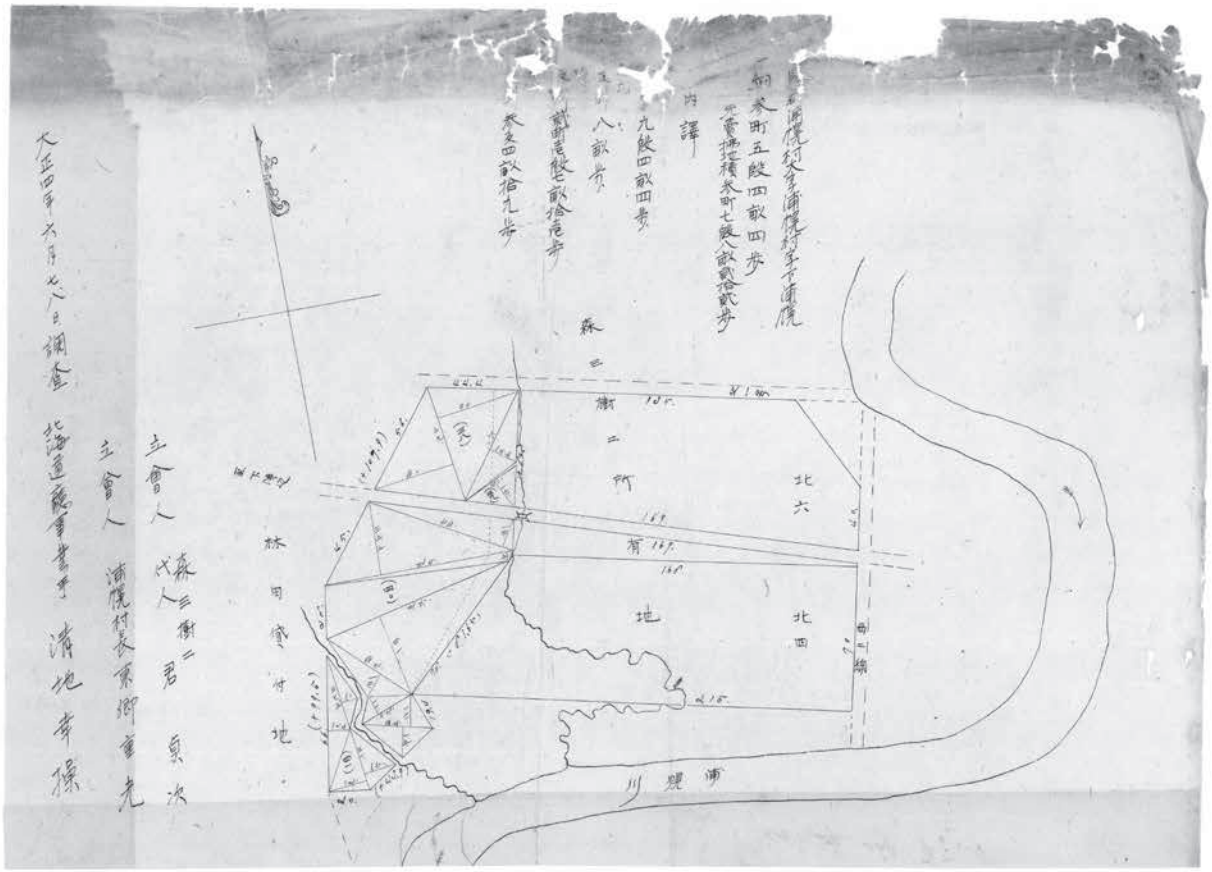
河西支庁廳事業手　清地　幸操

下浦幌　森三　樹二

代人　君　貞次

隣地

浦幌村長　東郷　重光



完（欄外）
結
票

「大正元」（加筆）年　十二月　二十日發議
仝　　年　〃　月　〃　日判決　　浄書　㊞　　校合　㊞
仝　　年　〃　月　〃　日扱濟
　　村長　㊞　　首席　㊞　　係　　起案者　㊞
番號　浦第　六六九六　號　　北海道十勝郡浦幌村「長」（加筆）
　　河西支廳長　宛

件名　土地無償付與出願許可申請
十勝郡浦幌村大字浦幌村字上浦幌東十一線三十四番地
一未開地壱町貳反歩
右ハ本村字川流布教育所敷地トシテ無償付與出願致度候御許可相成リ度別紙村會決議書写相添此段申請候也
※完結票無記載につき省略

大正四年　四月二十一日發議
仝　　年　〃　月　〃　日判決　　浄書　㊞　　校合　㊞
仝　　年　〃　月　廿三日扱濟　㊞
　　村長　㊞　　首席　　係　　起案者　㊞
番號　浦第　一，二五五　號　　北海道十勝郡浦幌村「長」（加筆）
　　河西支廳「長」（朱筆）　宛

完（欄外）
結
票

件名　浦幌市街番地境界実測ニ關スル件
浦幌市街地賣拂ノ許可ヲ受ケタルモノニシテ目下右宅地ニ家屋ヲ建設セントスルモノ及道路敷地侵害家屋ノ除去ヲ「ナス」（削除）「為」（加筆）サントスルモノ有之候モ何分（朱線有）其境界不分所一ヶ処アル為メ「之シカ」（削除）着手ニ躊」後日地割間数等ニ変更ヲ来タスコトナキヨウ整理シ之カ着手ニ躊躇致シ居ルモノニテ多々有之候ニ「付最」（朱で加筆）（朱線有）早融雪ニモ相成候条」「就テハ」（削除）至急実地測量調査員御派遣ノ上右境界明瞭ニ御測定相成「候」（朱加筆）様致度此ノ段申請候也
※完結票無記載のため省略す

割印（欄外）

大正　年　月　日裁決　大正　年　月　日扱濟　浄寫　校合
大正四年八月六日起案主任
　　村長　㊞　　首席　　係
發送番號　第　一五三三　號　　北海道十勝郡浦幌村「長」（加筆）
　　河西支廳第二課長　岩井　忠恭　宛

完（欄外）
結
票

件名　村有地境界調査ノ件
十勝郡浦幌村大字浦幌村字下浦幌参拾八番地
一　原野壱町九畝拾七歩
　仝参拾九番地
一　原野貳町四反拾九歩
　仝四拾番地
一　原野九畝拾六歩
　仝四拾壱番地
一　原野壱反九畝歩
右ハ先般森三樹二所有地トノ境界調査ノ為清地事業手出張實測ノ結果貳反四畝拾八歩ノ耕地ヲ生シ候趣ニ付該地積ハ本村基本財産ノ事ナレハ之カ整理ヲ為サヾエハ差支候ニ付清地事業手ノ□命ニ基キ右変更命令ノ手續至御取計相成度此段及御依頼候也
※完結票無記載のため省略す

設計書

一、敷地周囲ニ上巾弐尺一割五分ノ勾配ニシテ高サ五尺ノ土壘ヲ築□スル事

一、地域ノ雑草ハ総テ之ヲ刈リ取リ谷地坊主ヲ掘リ取リ地均シヲ行イ敷地ニ充当スルモノトス

以上

添付書類

一　大正元年十二月廿九日　道廳指令第三三八号写

一　明治四十四年七月四日　道廳訓第四七五号写

一　大正元年十二月二十五日　加西支廳地第一一〇一号写

一　教育所敷地無償付與出願ノ件

村会決議書写

以上

北海道廳指令第　三三五八　号

十勝郡浦幌村役場

大正元年十一月二十九日付浦第六二六一号申請川流布教育書ノ組織ヲ変更シ第七浦幌尋常小学學ト為スノ件許可ス

大正元年十二月二十七日　（手書）

北海道廳長官　石原　健三

印

訓第　四百七十五　號

十勝郡生剛村役場

川流布教育所ノ位置ヲ生剛村大字生剛村字上浦幌東十一線三十四番地（一町二段五畝歩）ニ指定ス

明治四十四年七月四日

北海道廳長官　石原　健三

手書き

地「第」（朱筆）一一〇一「號」（朱筆）

十勝郡浦幌役場

大正元年十二月二十日浦第六六九六號申請川流布教育所敷地トシテ上浦幌東十一線三十四番地ニ於テ未開地壱町貳段歩無償付與出願ノ許可ス

大正元年十二月二十五日

（黒スタンプ）（北海道廳河西支廳長）

北海道廳支廳長　村本　初太郎）

北海道廳河西支廳印

割印（欄外）

教育所敷地無償付與出願ノ件

字上浦幌東拾壱線三十四番地

未開地反別五町歩ノ内無償付與出願セントスルモノ

一壹町貳反歩　川流布教育所敷地

右　原本ニ依リ謄写ス

十勝郡浦幌村長　石原　重方

立會通知書

浦幌區内

印有り

大正「二」(加筆)年「五」(加筆)月「十七」(加筆)日「出」(加筆)願」シタル十勝國「十勝」(加筆)郡「上浦」(加筆)原野未開地附與願ニ対シ實施・・・」調査候條實印及用紙携帶来ル「八」(加筆)月「五」(加筆)日午前六時左記出張所へ出頭ノ上現場ニ立會セラルベシ

右北海道國有未開地處分法施行細則第十四條ニ依リ通知ス

大正　年　月　日

「十勝」(加筆)郡「上浦」(加筆)幌」村　森　平作　方

北海道廳河西支廳出張員

北海道廳　「田淵」(加筆)　繁蔵」

票

一、未開地壹町弐反五畝歩

但本地内樹木ナシ

二、目的及方法

第七浦幌尋常小學校敷地ニ使用スルモノトシテ周囲ニ土壘ヲ築キ以テ敷地ニ充当ス

右北海道国有未開地所分法第四條ニ係リ無償付與相成度別紙圖面設計書決議書許可書指定書相添此段相願候也

年　月　日　浦幌村長

河西支廳長　殿

注　完結票記載無につき省略

大正二年　五月十六日發議

仝　年　月　日判決　浄書　㊞　校合　㊞

仝　年〃月十九日扱濟　㊞

村長　㊞　首席　㊞　「庶務」(加筆)係　㊞　起案者　㊞

番號　浦第　二六八六　號　北海道十勝郡浦幌村

(大正三年二月九日)(加筆)

宛　番地及畝歩訂正進達)

割印(欄外)

完(欄外)

件名　未開地附與願

結　十勝國十勝郡浦幌村大字浦幌村字上浦幌東拾壱線三十四番地ノ壹

記

上浦幌東十一線三十四番地ノ一

一、原野壱町二段歩

第七浦幌小学學敷地目的

大正　二年　　月　　日裁決

大正　三年　五月　廿一日扱濟　㊞　浄書　㊞　校合　㊞

大正　三年　五月二十一日起案　主任　㊞

「庶務」（加筆）

村長　㊞　首席　係　㊞

「会計」（加筆）　㊞

發送番號　第　一九〇一　號　北海道十勝郡浦幌村「長」（加筆）

河西支廳　宛

割印（欄外）

完（欄外）

結

票

件名　未開地付與願ノ件

大正二年五月十九日浦第二、六八六号ヲ以テ末尾記載ノ未開地付與願出願本年二月九日地番、反別、更正進達之處本月十四日貴部ヨリ河西税務署宛官有地民有地成通書ニヨレバ「本月十四日」（削除）本村ハ無償附與之内示分ニ送成候旨ナルモ其「御」（削除）指令書到着不修「□」（削除）「□」（加筆）御調査相成度登記ノ關係モ有之候条及御照會候也

記

十勝郡浦幌村大字浦幌村字上浦幌村東拾壱線参拾四番地ノ一

一、未開地壹町弐反歩

以上

※完結票無記載のため省略

復命署

「□回り5」（欄外）

7

□□□

◎十八　八月五日上第七浦幌学校敷地実地調査立會ヲ命セラレ出張立會候

反八　處事業手田淵繁蔵ノ曰ク北海道廳令ニ依リ小学校敷地ハ壱町弐反

二リ　歩以内ニ付出願地弐五段歩候壱町壱反参畝弐拾歩トシ圖面七十五

二セ　間ニ四十五間ト更正実査候ニ付此段及復命候也

町約

一ト　大正弐年八月九日

＝手

0業

0事　書記補　松澤　源□□

6面

3圖

＝㊞

7ト日　浦幌村長　水越　儀一　殿

5コ三

×ル十

4ニ月」

（加筆）

附箋文　「五日付（□五□二十□ト□□）」（朱筆）

大正二年八月五日　書記補松沢立會合セシメタリ接續地植林地トシテ出願スルコト㊞

はがき（表）　（裏）

通知第「四四」（加筆）號

（欄外・朱筆）完結

上浦幌（川流布）
第七浦幌尋常小学校敷地書類
「（朱筆）大正三年六月二十日登記濟」

（欄外・朱筆）完結

（欄外・加筆）「基本財産」

（赤紫紙貼り付け）一一

（朱筆）「拓」（黒筆）「勝」（朱筆）「第」（黒筆）「二一八」（朱筆）「號」㊞

大正三年六月二十四日

河西支廳

北海道廳河西支廳長 ㊞

浦幌村長　東郷　重光　殿

（欄外）割印

未開地付与指令書交付ノ件

貴部内第七小学校敷地目的未開地壹町貳反歩ニ対シ所有権移転登記完了候ニ付別紙指令書及送付候也

北海道廳河西支廳「（加筆）指令」第「（加筆）七一九」號

北海道十勝郡浦幌村

大正二年五月二十一日願十勝國十勝郡浦幌村大字浦幌村字上浦幌東十一線三壹（欄外）字削除十四番地ノ一ニ於テ「（削除）畑」原野壹町弐反歩第七浦幌小學校敷地目的ヲ以テ北海道國有未開地処分法第四條ニ依リ無償付與ノ件許可ス

（欄外）壹字削除

大正三年五月十四日

北海道廳河西支廳長　松井　與一郎

北海道廳河西支廳長

順位番號	登記番號	町村ノ名称
弐番	第四二二三號	浦幌村

受附 第二六五號 明治三年六月二十日

登記濟 帯廣區裁判所大津出張所印

（朱筆）「拓」（黒筆）「勝」（朱筆）「第」（黒筆）「二一八」（朱筆）「號」

大正三年五月二十八日

河西支廳

北海道廳河西支廳長

浦幌村長　殿

（欄外）割印

未開地付与戻シニ干スル件

本月二十一日浦第九〇一号ヲ以テ御照會相成候左記未開地ハ本月十四日無償付与許可相成目下所有権移轉登記嘱託中ニ付□□記録ノ上指令書送付可致条此段申達候也

右賃借ニ関シ浦幌村長「井上吉衛」(加筆)ト「小川外五郎」(加筆)トノ間ニ於テ契約ヲ締結スルコト左ノ如シ

一、使用目的ハ「畑」(加筆)トス

二、賃借期間ハ大正「六」(加筆)年「三」(加筆)月日ヨリ大正「九」(加筆)年「拾」(加筆)弐」月「参拾壱」(加筆)日迄「四」(加筆)ヶ年トス

三、賃借料ハ壱ヶ年「六拾銭」(加筆)トシ規定ノ期日ニ納付スルモノトス但壹段歩ニ付金「四拾銭」(加筆)ノ割

四、賃貸料ハ如何ナル事情アルモ減免ヲ申出テサルモノトス

五、賃借人ハ本契約ノ外浦幌村土地建物賃貸規則ヲ遵守スルハ勿論将来該規則ヲ改正シ又ハ新ニ規定セラレタル事項ニ就テモ猶之ヲ遵守スヘシ

右大正「六」年「三」月　日「浦幌村役場」ニ於テ之ヲ締結シ各壱通ヲ所持スルモノナリ

貸主　浦幌村長　「井上」(加筆)　吉衛」

十勝郡浦幌村大字浦幌村字「下」(加筆)浦幌

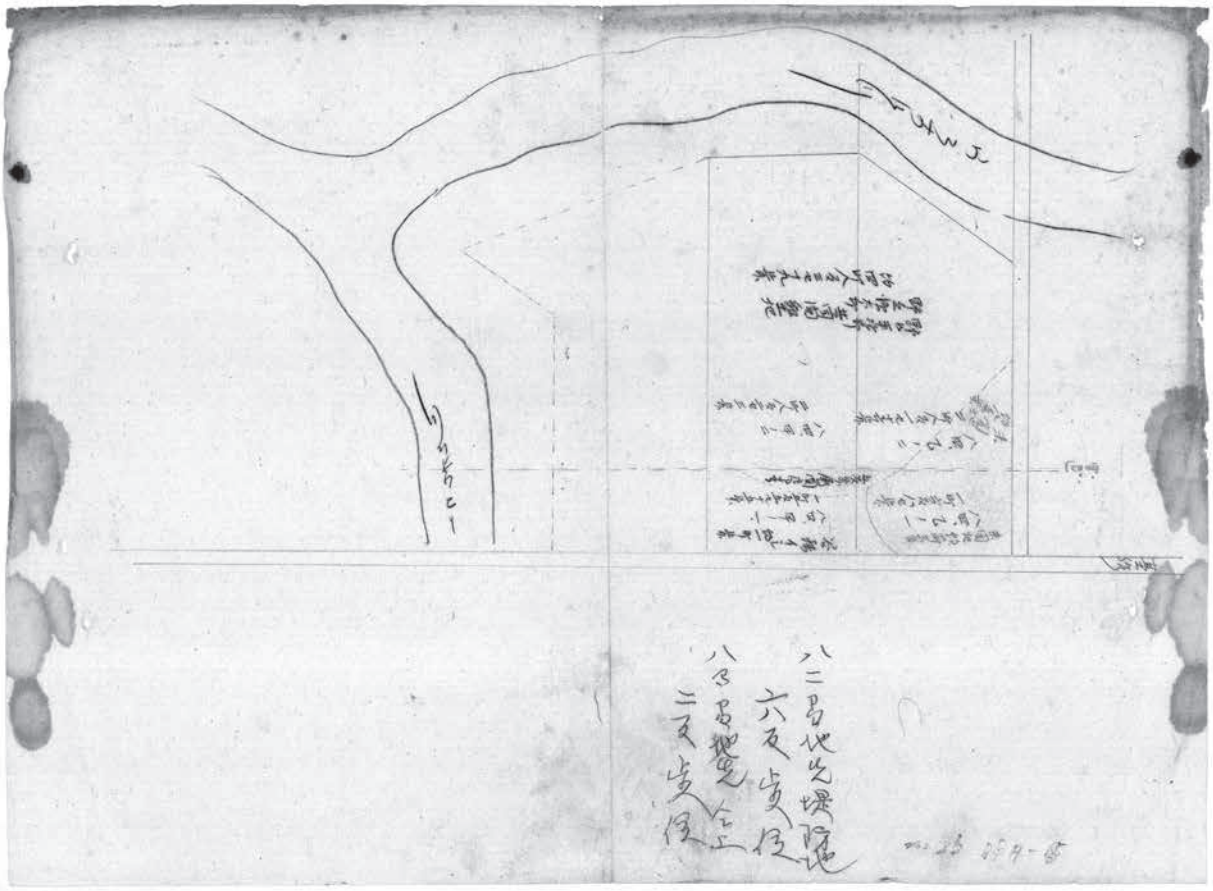
賃借人　「小川」(加筆)　外五郎」

十勝郡浦幌村大字浦幌村字「中」(加筆)浦幌

連帯保証人　「飯山」(加筆)　伊平」

「仝郡仝村大字仝村字下浦幌」(全文加筆)

連帯保証人　皆川　一平」



浦幌村長　井上　吉衛　殿
「(全文朱筆)右申込ヲ承諾シ別紙ノ通リ賃借契約締結可然哉
大正六年三月二十二日起案
村長　㊞　主任　㊞　」

土地賃借契約書
十勝郡浦幌村大字浦幌村字下浦幌
「(青インク)基線北八拾弐番地ノ壱
原野五段六畝貳拾歩
一、畑壱段歩」
右賃借ニ関シ浦幌村長「井上吉衛(青加筆)」ト「皆川一平(青加筆)トノ」間ニ於テ
契約ヲ締結スルコト左ノ如シ
一　使用目的ハ「宅地(青加筆)」トス
二、賃借期間ハ大正「六(青加筆)」年「三(青加筆)」月「弐拾八(青加筆)」日ヨリ大正
「九(青加筆)」年「拾弐(青加筆)」月「参拾壱(青加筆)」日迄「四(青加筆)」ヶ年トス
三、賃借料ハ壱ヶ年金「壱圓(青加筆)」トシ規定期日ニ納入スルモノトス
但シ壹段金「壱圓(青加筆)」ノ割
四、賃借料ハ如何ナル事情アルモ減免ヲ申出テサルモノトス
五、賃借人ハ本契約ノ外浦幌村建物賃貸規則ヲ遵守スルハ勿論将
来該規則ヲ改正シ又新規定セラレタル事項ニ就テモ猶之ヲ遵
守スヘシ
右大正「六(青加筆)」年「三(青加筆)」月「弐拾八(青加筆)」日「浦幌村役場(青加筆)」ニ於テ之ヲ
締結シ各壱通ヲ所持スルモノナリ
貸主　浦幌村長　「井上(青加筆)　吉衛」
十勝郡浦幌村大字浦幌村字下浦幌
賃借人　「皆川(青加筆)　一平」

十勝郡浦幌村大字浦幌村字中浦幌
連帯保証人　「飯山(青加筆)　伊平」
「仝郡(青加筆)仝村大字仝村字下浦幌
連帯保証人　小川　外五郎」

「土地賃借契約解約ノ儀ニ付願」
十勝郡浦幌村大字浦幌村字下浦幌基線北八拾貳番地ノ壱原野五段
六畝貳拾歩ノ内
一、畑貳段五畝歩（浦幌村有地）
右大正五年四月二十六日契約締結拙者賃借致居候処手不足ノ為メ
本地全部ノ耕作ハ到底出来難キ様ト相成候ニ付テハ内壱反歩ノ契
約解除被成下度此段奉願候也
大正六年三月二十二日
浦幌村大字浦幌村字下浦幌
小川　外五郎　㊞
浦幌村長　井上　吉衛　殿
「(全文朱筆)右壱反歩ニ對スル賃借契約ヲ解除シ別紙ノ通リ契約更新可然乎
大正六年三月二十二日起案
村長　㊞　主任　㊞　」

土地賃借契約書
十勝郡浦幌村大字浦幌村字「下(加筆)」浦幌
「基線(加筆)北八拾弐番地ノ壱原野五段六畝貳拾歩ノ内
一、畑壱段五畝歩」

件名
借地権譲渡願ノ件付要儀有之候条大正五年壱月六日午前拾壱時実印携帯当役場へ出頭相成度此段及通知候也
注　完結票無記載のため省略

借地権譲渡願

十勝郡浦幌村大字浦幌村字下浦幌東壹線北七拾八番　八拾番地
一　畑七町四畝五歩
但　御村所有地ニシテ大正弐年四月拾壹貸主浦幌村村長　借主
澤井善兵衛間土地貸借契約書ニヨリ［四年］（削除）六年拾弐月拾壹
日□澤井善兵衛ニ於テ賃借ノ分
右土地賃借権ヲ澤井善兵衛ヨリ香川美代次ニ譲渡致度候間御承認
相成度願上候也
大正四年拾弐年拾八日

十勝郡浦幌村大字浦幌村字浦幌［村］（削除）（欄外）壹字削ル
譲渡人　澤井　善兵衛　㊞
仝　所　字中浦幌
譲受人　香川　美代次　㊞（捨印）
㊞（捨印）
十勝郡浦幌村長　東郷　重光　殿

二字削ル

土地賃借申込書

十勝郡浦幌村大字浦幌村字西壹線北三番地ノ一
一　原野六段六畝貳拾歩
一　賃借期間大正六年ヨリ
一　使用目的　畑
右浦幌村土地建物賃貸規則承認ノ上賃借申込書ニ付御承諾相成度
候也
大正五年九月二日

十勝郡浦幌村大字浦幌村字下
浦幌西壹線北五番地
山田　メノ　㊞

十勝郡浦幌村長　井上　吉衛　殿

土地賃借申込書

十勝郡浦幌村大字浦幌村字下浦幌基線北八拾貳番地ノ壱
原野五反六畝貳拾歩ノ内
一　畑壹段歩
一、賃借期間　大正六年　参月　日ヨリ
大正九年拾貳月参拾壱日マテ
四ヶ年間
一、使用目的　宅地
右浦幌村土地建物賃貸規則承認ノ上賃借申込候ニ付御承諾相成度
候也
大正六年三月二十二日
浦幌村大字浦幌村字下浦幌
皆川　一平　㊞

賃借人　澤井　善兵衛　㊞

十勝郡浦幌村長　石原　重方　殿）

右讀聞カセタリ　㊞
代書業黒川常行

大正四年十二月二十八日發議
仝　年　月　日判決　浄書　㊞　校合　㊞
仝　四年十弐月参拾日扱濟
村長　㊞　首席　㊞　係　起案者　㊞
番號　浦第　一、九八九　號　北海道十勝郡浦幌村

宛

割印（欄外）
完（欄外）
票　結

件名　借地権譲渡承認書
十勝郡浦幌村大字浦幌村字下浦幌
譲渡人　澤井　善兵衛
仝郡仝村大字仝村字中浦幌
譲受人　香川　美代次
大正四年十二月拾八日付願浦幌村地畑七町四畝五歩借地権譲渡ノ件承認ス
大正［五］（削除）「四」（加筆）年［壱］（削除）「十二」（加筆）月［六］（削除）「三十」（加筆）日
浦幌村長　東郷　重光

完結票

完結	大正　六年　三月廿二日
村長	
首席	
主任	
目類	村有土地
保存	十年
數枚	九枚
第號	

大正　四年十二月二十八日發議
仝　年　月　日判決　浄書　㊞　校合　㊞
仝　年〃月〃日　㊞　扱濟
村長　㊞　首席　㊞　係　起案者　㊞
番號　浦第　一、九八九　號　北海道十勝郡浦幌村「役場」（加筆）付（欄外）

香川　美代次　宛

完（欄外）
票　結

香川　只次　㊞

（紫スタンプ）北海道十勝郡浦幌村「長」（加筆）　石原　重方　殿）

右讀聞カセタリ
代書業黒川常行
㊞

「村長（朱筆）代理」　㊞

土地賃貸継續届

（紫スタンプ）十勝國十勝郡浦幌村大字浦幌村「下」（加筆）浦幌）

東壱線北八拾四番八拾六番地

一、畑反別参町八段八畝十歩

但明治四拾参年壱五月八日土地賃貸契約締結ノ分　「一、七五〇」（鉛筆加筆）

右本年拾貳月末日ヲ以テ賃貸期間満了之處引續キ賃貸仕度此段御届仕候也

大正元年九月参拾日

（紫スタンプ）北海道十勝國十勝郡浦幌村大字浦幌村「下」（加筆）浦幌）

東貳線北八拾壹番地

前出　太三右衛門　㊞

（紫スタンプ）北海道十勝郡浦幌村「長」（加筆）　石原　重方　殿）

右讀聞カセタリ
代書業黒川常行
㊞

㊞　㊞

土地賃借継續届

（紫スタンプ）北海道十勝郡浦幌村大字浦幌村「下」（加筆）浦幌）

「一、七〇〇」（鉛筆加筆）

一、畑反別

但シ明治四十三年四月二十日賃貸契約大正元年十二月末日満了ノ分

右畑地私共ニ於テ賃借仕候処期間満了后引續キ賃借致度此段御届申上候也

大正元年九月三十日

（北海道十勝郡浦幌村大字浦幌村「下」（加筆）浦幌）

笹原　夏次　㊞

（紫スタンプ）北海道十勝郡浦幌村「長」（加筆）　石原　重方　殿）

右讀聞カセタリ
代書業黒川常行
㊞

代　㊞

賃貸借土地継続届□□届

十勝郡浦幌村大字浦幌村「下」（加筆）浦幌東壹線北七拾八番、八拾番

一、畑反別　七町四畝五歩

但シ明治四十三年五月八日賃借契約ノ分

右土地賃借契約期間継續ノ件御届候条□御都合右之当該継續届□□度候此段御届申上候也

大正元年四月七日

（紫スタンプ）北海道十勝郡浦幌村大字浦幌村字浦「下」（加筆）浦幌）

件名　出頭通知

曩ニ届出相成リ候村有土地賃借ノ件ニ付キ面談ヲ要スル義有之候条本月二十五日午後一時迄ニ当役場ニ出頭有之度リ候也

完結票　注、完結票無記載につき省略

割印（欄外）

［明治］（削除）「大正」（加筆）元年十二月廿一日年發議

仝　年　月　日判決　浄書　㊞　校合　㊞

仝　年　月　日扱濟　㊞

割印（欄外）

村長「村長代理」（朱筆）㊞　首席　㊞　係　起案者　㊞

番號　浦第　六六一六　號　北海道十勝郡浦幌村「役場」（加筆）

沢井　善兵エ　笹原　夏次

前出　太三右門　（添）

完（欄外）

結

票

宛

件名　耕地賃貸契約ニ関スル件

去ル四十三年四月二十日賃貸契約相成居候畑地ハ本月ヲ以テ期間満了ト相成リ候処「本村」（削除）「右ハ」（加筆）継続御契約ノ御意志ニ候□晩クモ本月二十五日迄契約願「ト共ニ保テ」（削除）相成度此段申進候也

追テ同日迄継続願出候ニ於テ賃借ノ意志ナキ□ト認メ他ニ貸付可致候条御承知相成度為念申添候也

完結票　注、完結票無記載につき省略

土地賃借契約届

十勝郡浦幌村字大字浦幌字下浦幌東壹線北七拾八番、八拾番

一、畑反別　七町四畝五歩

但シ明治四拾参年五月八日賃借契約満了ノ分　「一，三五〇」（鉛筆加筆）

右畑地私共ニ於テ賃借仕候処期間満了后引續キ賃借致度此段御届申上候也

大正元年九月参十日

十勝郡浦幌村大字浦幌村

字下浦幌基線北六拾壱番地

澤井　繕兵衛　㊞

十勝郡浦幌村長　石原　重方　殿

右讀聞カセタリ

代書業黒川常行　㊞

賃借地所有名義変更願

（北海道十勝郡浦幌村字「下」（加筆）浦幌）（紫スタンプ）

東壹線北八十四番地　八十六番地　「一，七〇〇」（鉛筆加筆）

一、畑参町八段八畝拾歩

右地所従来笹原夏治ニ於テ賃貸□□在之處大正元年壱弐月参拾壱日ヲ以テ期限満了依テ引継賃貸ノ義御届申上候処都合ニ依リ香川只次ニ名義変更ノ上御貸与相成度此段御連署御願申上候也

大正弐年参月弐拾八日

（北海道十勝郡浦幌村大字浦幌村「下」（加筆）浦幌）（紫スタンプ）

笹原　夏治　㊞

（北海道十勝郡浦幌村大字浦幌村「中」（加筆）浦幌）（紫スタンプ）

出無之候処他ノ賃借人ハ来ル四月四日迄ニ全部提出ノ筈ニ有之候条其許ニ於テモ同日午前十時までニ来場他ノ借人ト同様契約締結候様致サレ度此段申達候也

追テ同日迄ニ契約書差出サルヽトキハ借受ノ希望ナキモノト認メ処理可致候条了知相成リ度為申添至候也

完結票　注、完結票無記載につき省略

割印（欄外）
割印（欄外）
割印（欄外）

［明治］（削除）「大正」（加筆）［四十五］（削除）「貳」（加筆）年四月五日發議
仝　年　月　日判決　浄書　㊞　校合　㊞
仝　年　月　日扱濟　㊞
「庶務」（加筆）　㊞
村長　㊞　首席　係　起案者　㊞
「財務」（加筆）　㊞

番號　浦第　號　北海道十勝郡浦幌村「長」（加筆）
「□（加筆）告第二號」
宛

完（欄外）
結
票

件名　耕地賃貸ノ件
浦幌村字下浦幌東一線北七十八番地八十番地
一、畑七町四畝五歩
一、賃貸期間　五ヶ年
一、賃貸料一段歩ニ付金壱圓参拾五銭
右貸附ス希望ノモノハ本月十一日午後［三］（削除）「弐」（加筆）時迄当役場迄ニ申出ルベシ
（入札者ナキヲ以テ四月十一日沢井善兵エト随意契約）（朱肉・加筆）

完結票

完結	［明治］（削除）「大正」（加筆）貳年四月廿四日
村長	
首席	
主任	
目類	［告示］（削除）
保存	年
數枚	一〇枚
第	「十」（朱筆）號

割印（欄外）

［明治］（削除）「大正」（加筆）弐年　三月廿二日發議
仝　年　月　日判決　浄書　㊞　校合　㊞
仝　年　月　日扱濟　㊞
「庶務」（加筆）　㊞
村長　㊞　首席　㊞　係　起案者　㊞
「財務」（加筆）　㊞

割印（欄外）
完（欄外）

番號　浦第　六六一六　號　北海道十勝郡浦幌村「役場」（加筆）
沢井　善兵エ　笹原　夏次

結
票

前出　太三右門　宛

拓勝第　一七五　号
大正二年七月八日
河西市廳長
浦幌村長　殿
未開地賣拂願ノ件
下浦幌ニ於ケル貴村未開地賣拂願ニ關シ願書訂正再進相成候處願書ノ添付図添付漏ニ付別紙願書一及実測図一葉送御付候条謄写ノ上添付提出相成度此段申進候也追テ実測図ハ願書進達ノ際送付可有之候也
大正二年七月一日
十勝郡浦幌村長　水越　儀

浦第　四七四　號
大正二年七月一日
十勝郡浦幌村長　水越　儀一
河西支廳　御中
未開地賣拂願ノ件
客月十九日拓勝第一七五号御□□ニ基キ不備ノ點整理ノ上進達候条至急御詮議相成度候也
拓勝　一七五　号
大正二年六月二十日
河西支廳
浦幌村長　殿
未開地賣払願ノ件
下浦幌ニ於ケル貴村未開地賣拂願ニ關シ別紙ハ付箋ノ處不備ニ付整備再進□有之願書一通実測図一葉添付此段申達候也
配当地積
初年　一、五〇〇〇　二年　一、五〇〇〇
三年　一、五〇〇〇　四年　一、五〇〇〇
五年　一、五〇〇〇　六年　一、五〇〇〇
七年　一、四一〇九
（成功期間　始　大正三年　至　大正九年）

[明治](削除)「大正」(加筆)二年[四](削除)月「三」(加筆)月三十一日判決
[明治](削除)「大正」(加筆)二年三月三十一日扱濟浄寫　(印)　校合　(印)
[明治](削除)「大正」(加除)弐年三月三十一日起案　主任　(印)
「庶ム」(加筆)　(印)
村長「代理」(朱筆)　(印)　首席　(印)　係
「財務」(加筆)　(印)
發送番號　第　六六一六　號　北海道十勝郡浦幌村「役揚」(加筆)
香川　只次　宛

割印(欄外)
完(欄外)
結
票

件名　土地賃貸契約ニ関スル件
本月二十八日来場際元笹原夏次賃借ノ村有畑地名義変更上ノ借受ケ度旨願出ニ付キ契約証差出スヘキ旨示達致シ置キ候ヘ共今ニ提

村有土地ニ關スル書類(10)

三浦直春 解読

「北海道廳指令第」(朱筆)　㊞　「五、(黒筆)九五八」「號」(朱筆)　㊞

北海道十勝郡
浦幌村

大正二年四月十二日願十勝國十勝郡浦幌村大字浦幌村字下浦幌基線十六番地ノ一原野九畝貳歩　同番地ノ二原野壹町壹反九畝五歩
同番地ノ三原野貳町六反参畝壹歩　同番地ノ四原野四反八畝参歩
同西壹線拾五番地ノ一原野四町七反五畝拾壹歩　同番地ノ二原野
五畝二歩　同西二線拾五番地ノ一原野参町七反五歩　同番地ノ
二原野壹畝拾歩畑目的ヲ以テ賣拂ノ件許可候條左ノ通心得ヘシ

大正二年八月二十三日

北海道廳長官　中村　純九郎

北海道廳長官之印

一、事業成功期間ハ「七」(加筆)年トス
二、土地「及立木」(加筆)ノ代金「七拾円圓八拾錢」ハ納入告知書期間内ニ納付スヘシ
三、前項ノ代金ヲ指定ノ期間後六十日ヲ經過スルモ尚納付セサルトキハ本許可ハ其効力ヲ失フモノトス
四、天災其他避クヘカラサル事由ニ依リ代金ヲ納付スルコト能ハサルトキハ前項ノ期間内ニ限リ許可失効ノ猶豫ヲ出願スルコトヲ得

割印(欄外)　割印(欄外)

五、土地及立木ノ所有權ハ第二項ノ代金ヲ納付レル時ニ於テ之ヲ取得スルモノトス

順位番號	登記番號	町村ノ名称
貳番	第四〇八〇号乃至第四〇八七号	浦幌村

受附　第六四七号　大正二年十月二十四日

登記濟　帶廣區裁判所大津出張所長

浦第　四七四　號

未開地賣拂ノ件

本月八日拓勝第一七五號ヲ以テ御照会ニ係ル未開地賣拂願書添付図別紙提出候条御収査成度候也

追テ実測図御返送候也

大正二年七月十二日

十勝郡浦幌村長　水越　儀一

河西支庁廳長　松井　与一郎　殿

投稿希望の方へ

浦幌町立博物館では、『浦幌町立博物館紀要』への投稿者を募っています。掲載範囲は、浦幌・十勝並びに北海道を含む北方圏に関する論文、短報、資料紹介、紀行、調査記録などです。投稿希望者は、当館へご連絡下さい。

原稿は、手書き・ワープロ・パソコンなどの別は問いませんが、１行45文字に統一して下さい。図版原稿は、黒インクで浄書したものに限ります。１ページの印刷面の大きさは縦236mm×横156mmですが、下部にキャプションが入りますので、配慮して下さい。

なお、ワープロまたはパソコン原稿の場合、打ち出し原稿１部を添付して下さい。

浦幌町立博物館紀要　第13号

発行日　2013年３月31日

編　集　佐　藤　芳　雄

発行所　浦幌町立博物館
〒089-5614　北海道十勝郡浦幌町字桜町16番地１
電話　015-576-2009　　FAX. 015-576-2452

印刷所　大同出版紙業株式会社
〒080-0017　北海道帯広市西７条南６丁目２番地